畦地下遺跡

―畦地7号古墳―

飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市建設部土木課
長野県飯田市教育委員会

畦地下遺跡

―畦地７号古墳―

飯田市座光寺古市場地区市道改良工事に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市建設部土木課
長野県飯田市教育委員会

序

当飯伊地域における職業教育の一端を担い、地域の工業振興の原点ともいえる人材を供給している長野県飯田工業高等学校は、長く市街地西部の上飯田地区にあったが、その建物は老朽化し、敷地面積も狭く、教育施設としては、不十分といわざるを得ない状況でした。

このたび、市内座光寺地区に同校が移転新築され、平成元年10月には新校舎での授業が開始されています。

飯田市では、同校の開校に合わせ周辺の環境整備を計ると同時に、地域住民の強い要望に答えることもあり、市道の改装工事を実施して来ました。

たまたま、その地が長野県史跡高岡１号古墳にも近く、市内でも有数な古墳群の所在する一帯にあたるため、当教育委員会では、道路建設予定地について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を行ない後世に伝えるため記録保存を計ることとなったわけです。

その結果は、当初の予定どおり、消滅してしまった古墳の周囲をめぐる溝など貴重な資料が発見されました。そのいずれもが、解明途上にあるといえる当地域の古墳文化研究や地域史解明に多大な成果を挙げ得たと考えています。

そうした貴重な発見が、道路建設という地域的な課題の中で消失することは断腸の思いではありますが、その道路完成により、市内北端にあたる座光寺地区の地域振興が図られることに替えて、消失する文化財を本書に記して後世に長く伝えることを次善の策として納得しているところです。

最後に、本調査及び本書作成にあたり、多大なご援助・ご協力・ご理解をいただいた関係各位に深く感謝し、衷心よりお礼申し上げます。

1992年３月

飯田市教育委員会

教育長　小　林　恭之助

例　言

1．本書は、飯田市座光寺古市場地区の市道改良工事に先立ち実施した畦地下遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2．調査は、飯田市教育委員会が飯田市建設部土木課の委託を受けて実施した。

3．本書の発掘調査に関し、本調査地点は東から南側にかけて、石行遺跡と高岡遺跡に隣接する地であるが、遺跡名を「畦地下遺跡」とし、発掘調査及び整理作業において、遺跡名に略号AZSを用いた。また、新規に確認された古墳については、畦地古墳群の末番となる７を付し「畦地７号古墳」として、AZCK７の略号を用いた。

4．調査実施にあたり、２ｍ四方の小区画を設定して作業を行なった。しかし、宅地の移転などの諸事情から、道路を挟んで東側と西側を同時期に調査することができず、さらに、排土場所の関係から一気に調査できる部分が二分される所も生じたため、結果として同一の区画設定ができなかった。

5．調査は、まず、対象範囲の西側部分について調査を実施する事となり、平成２年１月４日、５日と重機により表土剥ぎを行い、９日からは人力による調査を実施した。26日には排土を重機により調査終了部分に返した後、引き続き人出による精査を行い、11月５日に一旦作業を終了した。東側は、住宅の取り壊し後の平成３年２月19日に重機による表土剥ぎをおこない、21日からは人力による調査を実施した。３月５日には調査対象地のうち本時点で、調査可能部分の現地での調査を終了した。

6．本報告書の記載は、古墳を優先し、次にほかの遺構を掲載した。遺構図は本文と併せ挿図とし、遺物及び写真図版は本文末に一括した。

7．本書は、小林正春・佐合英治が分担執筆した。なお、文書の一部について小林が加筆・訂正を行なった。

8．本書に掲載された図面類の整理、遺物実測は佐合があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補左した。

9．本書の編集は調査員全体で協議の上、佐合が行い、小林が総括した。

10．本書に掲載した遺構図の中に記載した数字は、基本的に検出面からそれぞれの深さ（単位cm）を表しているが、古墳の部分については、標高453.00ｍからマイナスした数字で表した。

11．本書に掲載した石器の表現として、使用痕及び擦痕は図内及び図外に実線で、刃つぶし及び敲打痕は図外に破線で示した。

12．本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本 文 目 次

序
例言
目次
Ⅰ 経過 …… 1
1 調査に至るまで …… 1
2 調査の経過 …… 1
3 調査組織 …… 2
Ⅱ 遺跡の環境 …… 5
1 自然環境 …… 5
2 歴史環境 …… 5
Ⅲ 調査結果 …… 13
1 遺構と遺物 …… 13
1） 古墳 …… 13
① 畦地7号古墳
2） 溝状址 …… 19
① 溝状址1
3） 土坑 …… 19
①土坑1 ②土坑2 ③土坑3 ④土坑4 ⑤土坑5 ⑥土坑6
⑦土坑7 ⑧土坑8 ⑨土坑9 ⑩遺跡10 ⑪土坑11 ⑫土坑12
4） その他の遺構 …… 23
①穴址
5） 遺構外遺物 …… 26
Ⅳ まとめ …… 27

挿 図 目 次

挿図１　畦地下遺跡位置及び周辺遺跡位置図 …… 4
挿図２　調査位置及び周辺現存古墳図 …… 8
挿図３　畦地下遺跡遺構位置図 …… 9・10
挿図４　畦地７号古墳及び北側用地境土層図、土坑12 …… 11・12
挿図５　切子玉計測方法 …… 18
挿図６　溝状址 …… 19
挿図７　土坑１・２・３（周辺穴）・４・５・７ …… 21
挿図８　土坑４～11及び周辺東部穴址、北側用地境部分土層図 …… 24
挿図９　東端部穴址、南側用地境部分土層図 …… 25

表 目 次

第１表　畦地７号古墳周溝出土土器計測表 …… 17
第２表　畦地７号古墳周溝出土玉類計測表 …… 18

図 版 目 次

第１図　畦地７号古墳周溝出土土器 …… 30
第２図　畦地７号古墳周溝出土土器 …… 31
第３図　畦地７号古墳周溝出土土器 …… 32
第４図　畦地７号古墳周溝、土坑１・２・10、穴出土土器 …… 33
第５図　畦地７号古墳周溝出土切子玉 …… 34
第６図　畦地７号古墳周溝出土切子玉・ガラス玉・臼玉 …… 35
第７図　畦地７号古墳周溝出土鉄製品、遺構外出土土器・銭 …… 36
第８図　遺構外出土石器 …… 37
第９図　遺構外出土石器 …… 38

写 真 図 版 目 次

図版１　調査地調査前（西から）、同上西部（東から）、同（西から）…… 40
図版２　西部西側全景、東部全景（西から）、同上（東から）…… 41
図版３　畦地７号古墳墳丘基底及び周溝、同上 …… 42
図版４　丘基底頂部（土層断面）、同上細部、周溝肩部及び土層断面 …… 43
図版５　周溝肩部細部土層断面、南西部葺石・転落石検出状態、周溝東側溝址切り合い状態 44
図版６　周溝及び溝北側土属断面、土坑１・２、土坑３ …… 45
図版７　土師器瑙出土状態、提瓶出土状態、須恵器壷・甕出土状態 …… 46
図版８　切子玉出土状態、同上 …… 47
図版９　周溝出土土師器　、周溝出土土師器小甕、同土師器甕、同土師器甕 …… 48
図版10　周溝出土土師器坩、同土師器椀、同土師器椀、同土師器坏 …… 49
図版11　周溝出土須恵器壷、同須恵器壷、同提瓶 …… 50
図版12　周溝出土須恵器壷・壷、同須恵器甕、同須恵器椀、同須恵器高坏、同須恵器蓋 … 51
図版13　周溝出土須恵器、同須恵器坏、同須恵器坏 …… 52
図版14　周溝出土切子玉・ガラス玉・臼玉、土坑出土須恵器・土器（左から１・２・10)、
　　周溝出土鉄製品、穴出土灰釉陶器・須恵器 …… 53
図版15　遺構外出土須恵器甕・壷、同かわらけ・山茶碗・磁器・天目茶碗・陶器、同上 … 54
図版16　遺構外出土石器、同上、遺構外出土石器、周溝上部出土鉄器、遺構外出土銭 …… 55
図版17　重機による表土剥ぎ、同上、遺構検出作業 …… 56
図版18　遺構検出作業、周溝掘り下げ作業、周溝及び溝掘り下げ作業 …… 57
図版19　穴掘り下げ作業、清掃作業、測量作業 …… 58

Ⅰ　経　過

1．調査に至るまでの経過

長く飯田地区に所在し、老朽化した長野県飯田工業高等学校が、座光寺高岡地区に新築移転され、平成元年10月に開校した。その正門部分の整備に合わせ、進入道路も新たに建設されることとなった。

一方、座光寺地区は、段丘の上段部と下段部を結ぶ道路が旧態のままで、現在の自動車全盛の時代の中で、早期に拡幅すべく強い地域要望があった。

そのような状況の中で、飯田市建設部土木課により、万才地区を通過し上段と下段を結ぶ市道と拡幅整備計画が具体的に立案され、第１期の工事として、旧国道135号に取り付く部分から飯田工業高校入り口部辺について平成元年度から工事が実施されている。

平成元年に至り工事計画が具体化する中で建設部土木課から、飯田市教育委員会に埋蔵文化財の保護について協議依頼があった。それにより。同年３月14日長野県教育委員会文化課、市建設部土木課、市教育委員会社会教育課の担当職員がそれぞれ立ち合って現地において、その保護策について検討、協議を行った。

その結果、飯田工業高校の開校に合わせて平成元年度に旧国道接続部分の発掘調査を実施し、その後道路建設も進行し、一部共用が開始されている。

引き続き、第２工区内においても、１期区間同様に埋蔵文化財の包蔵地が所在することも確認され、順次用地取得完了部分について発掘調査を実施する旨、市建設部土木課と飯田市教育委員会とで協議する中で決定された。

2．調査の経過

事前の協議の結果、宅地の移転・撤去等の諸事情があり、調査必要部分が一度に調査できなかったが、調査可能部分から随時行なうことになった。これを受け、調査対象範囲の中央部から着手することとなった。

調査は、平成２年10月４日に重機により表土剥ぎを行い、８日からは人力による作業に入った。この時点で新たな古墳の存在が確認され、畦地７号古墳とした。古墳の周溝、土坑等の精査・写真撮影・測量等を随時実施し、20日にはこの部分の調査が終了した。26日には重機により、排土を調査完了部分に返した。29日からは再び人力による調査に入り、連続する畦地７号古墳周溝と、

土坑等を把握した。掘り下げ作業として写真撮影等を行い、11月５日にはこの部分の測量作業も終了した。

宅地撤去の為、中断していた南東側の調査は、平成３年になって行なった。２月19日から重機による表土剥ぎに入り、22日からはこれと平行して人力による作業も実施した。穴、土坑等を確認し、精査・写真撮影を行なった。この部分についても３月５日には測量作業も終了した。

引き続いて、平成３年度末まで飯田市考古資料館において、記録された図面・写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・復合作業、実測・写真撮影等を行い、報告書作成作業にあたった。

３．調査組織

(1) 調査団

調査担当者　小林　正春

調　査　員	佐々木嘉和	佐合　英治	吉川　　豊	馬場　保之	渋谷恵美子
作　業　員	今村　春一	今村　勝子	今村　道子	北村　重実	木下喜代恵
	小池金太郎	小池千津子	佐々木　啓	佐々木智子	田中　正人
	豊橋　宇一	原田四郎八	福沢トシ子	古田八重子	細井　光代
	正木実重子	正木　睦子	沢柳　敞介	吉川　正実	
整理作業員	池田　幸子	伊原　恵子	大蔵　祥子	金井　照子	金子　裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下　早苗	木下　玲子
	櫛原　勝子	小池千津子	小平不二子	小林　千枝	田中　恵子
	筒井千恵子	樋本　宣子	丹羽　由美	萩原　弘枝	原沢あゆみ
	平栗　陽子	福沢　育子	福沢　幸子	牧内喜久子	牧内とし子
	牧内　八代	松本　恭子	三浦　厚子	南井　規子	宮内真理子
	森　　信子	森藤美智子	吉川紀美子	吉川　悦子	吉沢まつ美
	若林志満子	斎藤　徳子	渋谷千恵子		

(2) **事務局**

飯田市教育委員会

竹村　隆彦（飯田市教育委員会社会教育課長）平成２年度
安野　　節（飯田市教育委員会社会教育課長）平成３年度
中井　洋一（飯田市教育委員会社会教育課文化係長）
小林　正春（　　〃　　〃　文化係）
吉川　　豊（　　〃　　〃　文化係）
馬場　保之（　　〃　　〃　文化係）
篠田　　恵（　　〃　　〃　文化係）
渋谷恵美子（　　〃　　〃　文化係）平成３年度

1．畦地下遺跡・畦地７号古墳調査地点　2．石行遺跡　3．恒川遺跡群
4．流田遺跡　5．欠野遺跡　6．正泉寺遺跡　7．高森町新井原遺跡
8．新井原遺跡　9．座光寺原・中島遺跡　10．北原遺跡　11．阿島遺跡
12．寺所遺跡　A．高岡１号古墳　B．畦地１号古墳　C．北本城古墳

挿図１　畦地下遺跡位置及び周辺遺跡位置図

II　遺跡の環境

1．自然環境

畦地下遺跡は飯田市座光寺北市場地籍に所在する。

飯田市座光寺は、市街地の中心から約５km北方にあり、南を下伊那郡上郷町、北を同高森町に挟まれ行政上は飛び地となっている。座光寺地区は、東は天竜川・西は中央アルプス・南は土曽川・北は南大島川により区切られた、南北約２km、東西約7.5kmの旧座光寺村である。

当座光寺地区内は南北方向に走る断層崖により段丘が形成され、天竜川左岸では比較的良好に段丘地形が捉えられる。地区のほぼ中央を横断する比高差約100ｍの段丘崖で、大きくは俗にいう上段、下段に別れている。山麓から発達した扇状地が段丘面をおおった上段と、崖下に湧水地を控えた下段それぞれに、小段丘と扇状地が複雑に連続、形成されている。さらに、これを小河川が侵食して小さな谷間を作っており、各所で微地形の変化が認められる。

本遺跡は、旧座光寺村東北部の低地にあり、天竜川第三段丘の緩傾斜地の北西部端に位置している。高岡古墳群、新井原古墳群を含めた一帯から続く傾斜地に含まれるが、万才台地の裾に一部かかるため、傾斜はややきつくなっている。本調査地点の標高は451～454ｍである。

また、調査した地域の地山中には総じて大小の石が混入し、中には３ｍをこえるものも認められる事から、北側に所在する天竜川支流の南大島川による扇状地形成時の流出土であることがうかがえる。さらに、南東端には、東から押し出された礫土の堆積があり、現地形では把握できない扇状地の端部とも考えられる。

2．歴史環境

座光寺地区における発掘調査の最初は、大正11年11月に現在の東日本鉄道飯田線にかかわって調査された大塚（新井原12号古墳）で、この頃鳥居龍蔵氏の遺物調査も行なわれている。

大正12年には、本遺跡に接する台地上部にある畦地１号古墳石室が、座光寺小学校職員と高等科生徒によって、清掃調査され、銀製の「垂飾付長鎖式耳飾り」のほか、玉類、馬具などが発見されている。その後昭和30年代まで記録は無く、破壊のみが進んでいたと思われる。

昭和37（1962）年には、前年の梅雨前線による集中豪雨（36災）の災害復旧工事用採土に先立ち、下伊那教育会歴史調査部によって上段の一部座光寺原遺跡が調査され、弥生時代後期後半の標識「座光寺原式」が設定されている。

その後いくつかの発掘調査が行なわれ、昭和45年には中央自動車道建設に伴う発掘調査で、座光寺地区では宮崎、大門原など５遺跡が調査された。

昭和50年（1975）年には、農業構造改善事業に伴う道路部分の調査で、中島遺跡が座光寺考古学研究会・下伊那教育会考古学委員会によって調査され、弥生時代終末期標識「中島式」の設定の元となった。

昭和51（1976）年度から一般国道153号座光寺バイパス建設に伴う発掘調査が、当飯田市教育委員会によって行なわれた。その結果、恒川遺跡群は多期にわたる遺跡の密集地であり、且つ、重要遺構・遺物の出土があり、古代伊那郡の推定「郡衙」の一画として注目された。

その後、座光寺バイパス全通直後から、道路沿いに店舗等民間の開発に伴う調査が行なわれ出した。

昭和61年～平成３年（1986～1991）までに、田中・倉垣外地籍、恒川B地籍、阿弥陀垣外地籍、新屋敷地籍で、整理中のものも含め、大小10カ所の調査が行なわれた。また、これとは別に本調査も含め、数カ所で調査が実施された。

上記の通り、この地域の道路沿いの開発は著しく、ほぼ終了してしまった様な状況にあるが、恒川遺跡群内に「郡衙」の確認を求めて、昭和57年度から文化庁の補助を受けた恒川遺跡群確認調査が始まり、平成２年度で10年を経過した。調査地点の制約等から、まだ確証には至っていないが、遺構、遺物共に傑出するものもあり、更に重要性は増している。

以上、地区内における、埋蔵文化財の調査結果のいくつかをふまえ、地区内の歴史上の変遷を既述すると次のようである。

座光寺地区の埋蔵文化財包蔵地は20余りを数え、埋蔵文化財は縄文時代から近世にいたるまで切れ間なく存在している。このうち地表に見える構造物としては、古墳と中世の山城２つがあげられ、古くから古墳の多いこと、土器、石器の散布の多いことで知られており、家宝として鏡、玉などを所蔵している人たちも多い。

地区内における遺跡の時期的分布は、上段地帯に縄文、弥生時代の遺跡があり、山寄りほど縄文時代の遺跡濃度が増している。中央の段丘崖下に古墳、中世山城が位置し、下段には縄文時代から近世の遺跡が複合して分布している。

当地区内での各時代の具体的な内容を見ると、縄文時代においては、その早期から晩期まで途切れることなく、各時代の遺物が、上段、下段のほぼ全域から発見されている。この中で、最初の人々の痕跡としては、縄文時代早創期の有舌尖頭器の出土例であるが、これより前、旧石器時代から、この地区が中心的な役割をはたしていたと判断される。

続く、弥生時代においては、地区内において中心的な地であった姿がより明確に捉えられる。それは、弥生時代中期から後期にかけて、恒川式、座光寺原式、中島式と三つの標識遺跡が存在し、各期の大集落が展開したことで知られる。

古墳時代を代表する古墳を見ると、現存するものは10余りであるが、下伊那史には古墳総数66

基の記録がある。その後、石行遺跡、高岡遺跡の調査等で、新たに10基の古墳が調査されている。さらに、本調査でこれに加え新規の古墳１つを確認したこととなる。

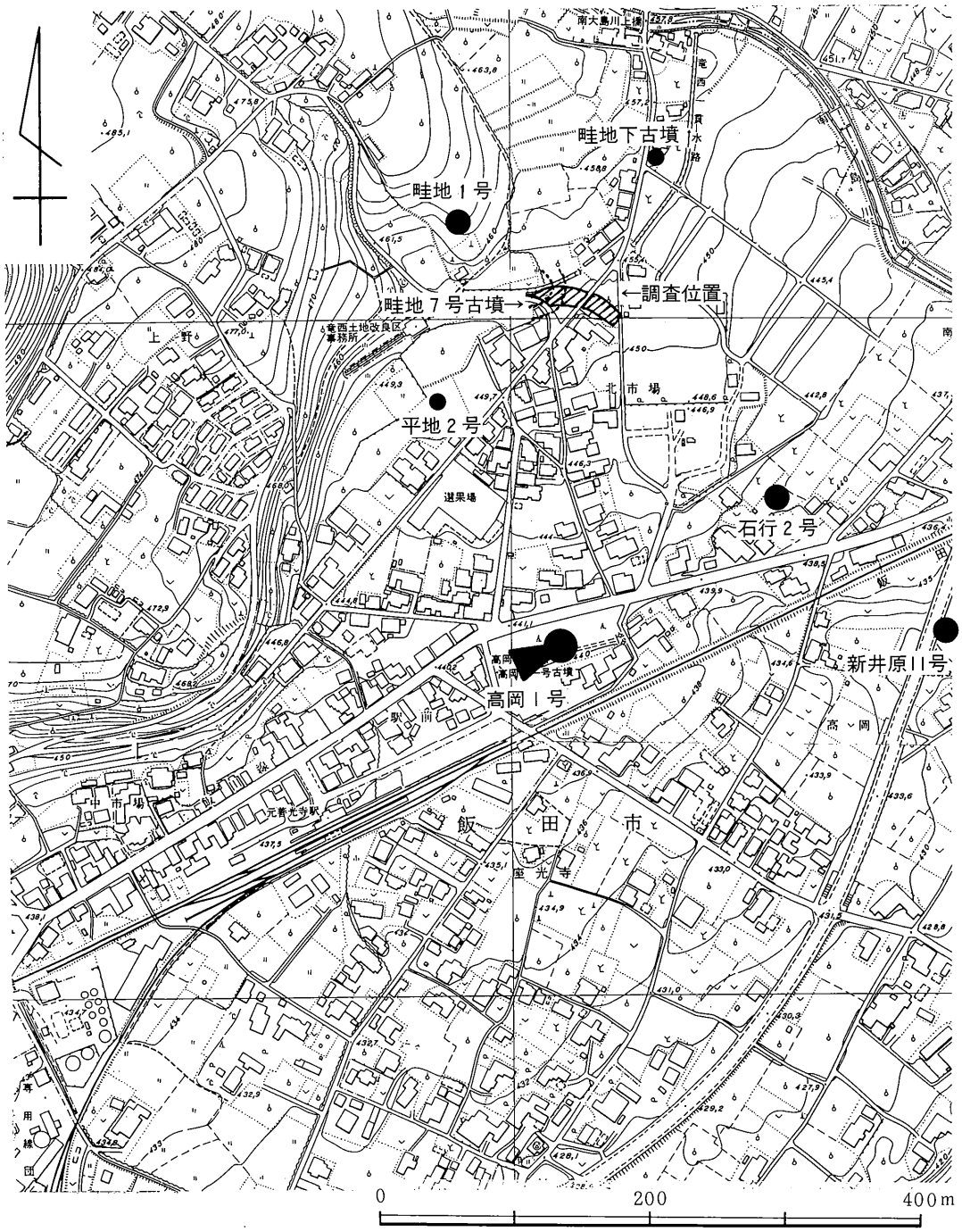
本時代も含め、各時代の遺跡の開懇、盗掘による破壊は地区内全域におよび、盗掘にあっていない古墳は皆無といって良いだろうが、現在確認されただけで77基の古墳が構築された事実や、その副葬品をはじめとする内容にも傑出したものが多いことから、伊那谷の該期を代表する地区の一つとなっている。

続く、奈良、平安時代については、当地区が、歴史上最も重視されるべき時代といえる。それは、先述した恒川遺跡群における、古代伊那郡衙址の存在であり、定額寺院の寂光寺の存在である。この時代、伊那谷の政経の中心であったことは、いうまでもなく、さらに、大和朝廷による国政遂行上でも、欠くことのできない地であったといえる。

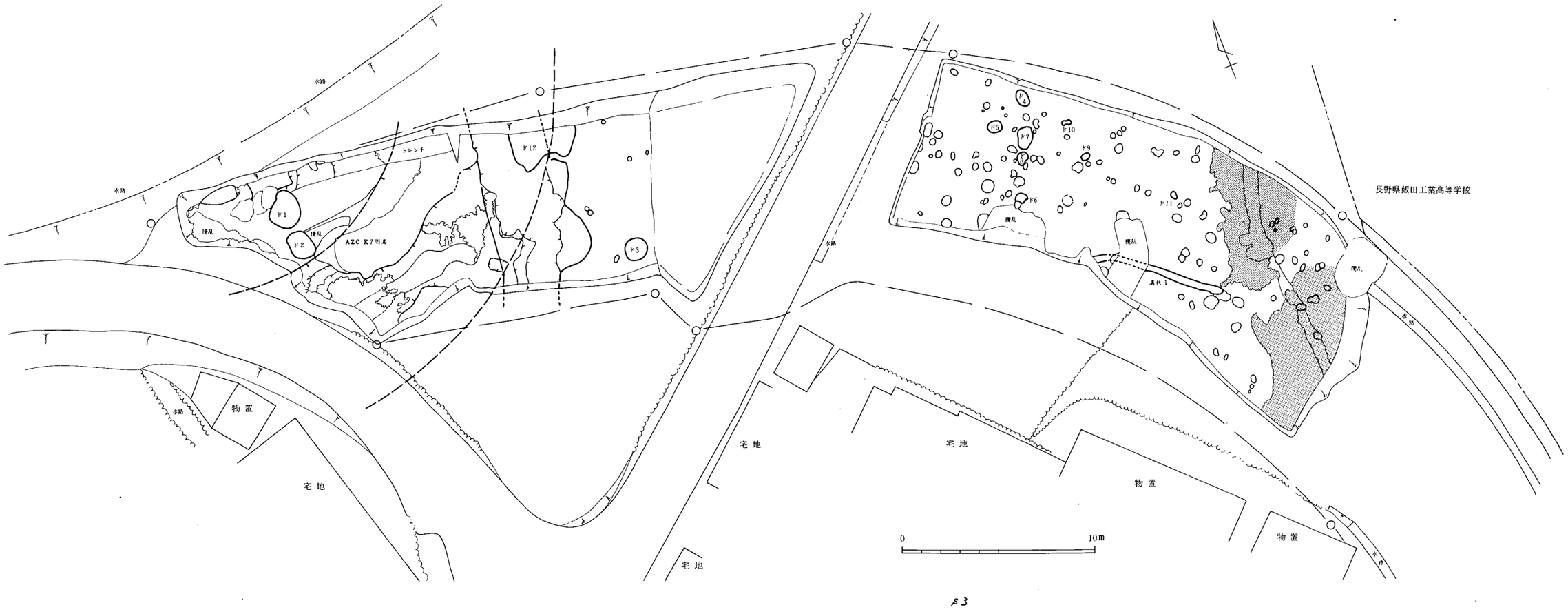
次時代の中世以降は、当地区において、歴史資料の希薄な時期である。南本城、北本城の二城があるにもかかわらず、具体的な歴史事実は未解明な状況である。しかし、各所で行なわれている埋蔵文化財の発掘調査において、輸入磁器を含む、ほかに例のないような優品を出土することも多い。史実には登場しないが、本時代に於いても、当地区は重要な役割をはたしていた事が推測される。

以上のように、各時代それぞれに重要な意味を持つ歴史背景の認められる地区の中に、本畦地下遺跡も存在している。そこは、文中に何度も登場したように、古墳の密集地であり、今回の調査でも新たな古墳が確認されたわけである。

調査地点は、南東側で石行遺跡と接し、その南方には高岡遺跡、新井原遺跡が続いている。これらの遺跡を含め、本遺跡周辺には50基に及ぶ古墳の伝承があるが、このうち現存古墳は６基である。北西70ｍの見上げる位置には、畦地１号古墳が、南西100ｍには平地２号古墳があり、南方260ｍには高岡１号古墳の森が見られる。北東130ｍには畦地下古墳、南東220ｍと390ｍには、石行２号古墳と、新井原11号古墳がある。また、新井原11号古墳はこの傾斜地が南大島川によって切られる南東端に位置している。この事は、この地が古墳をはじめとする墓域としての、土地利用の姿がより一層明確に示されたといえる。



挿図２　調査位置及び周辺現存古墳図



挿図3　畦地下遺構位置図

1．表土（黒色砂土）
2．表土（砂土混り黒色土）
3．耕土（黒色泥質土）
4．耕土（褐色土混り灰色砂質土）
5．石混り黄色砂利土
6．灰色土混り黒色土
7．黒色土混り褐色土
8．黄色土混り褐色土
9．暗灰色土
10．褐色土
11．暗褐色土
12．白色砂土混り褐色砂土
13．砂土混り褐色砂質土
14．明褐色土
15．黄色土ブロック混り暗褐色土
16．黄色土混り褐色土
17．黒色土混り褐色土
18．黄色土ブロック混り褐色土
19．黄色土混り明褐色土
20．黄色土ブロック混り明褐色土
21．黒色土（A墳丘盛土／B周溝埋没後堆積土）
22．黄色土混り黒色土
23．黒色土混り黄色土（黄色土は層で堆積）
24．黄褐色土
25．黄色土混り漆黒色土
26．漆黒色土（A旧地表土／B周溝内堆積土）
27．褐色土混り漆黒色土
28．黒褐色土
29．黄色土
30．黄色土混り黒色土（黄色土は層で堆積）
31．漆黒色土混り暗褐色土
32．暗褐色砂質礫土
33．漆黒色土混り黒色土
34．暗褐色砂質土（地山漸移層）
35．明褐色砂土
36．黒色土混り明褐色土
37．黄色砂土混り黒色土
38．黒色砂質土

●印は切子玉出土位置
数字は標高453.00mからのマイナスcmを示す

挿図 4　畦地 7 号古墳及び北側用地境土層図、土坑12

Ⅲ　調査結果

1．遺構と遺物

1）古　墳

①　畦地７号古墳（挿図４　第１～７図）

調査対象部分の西に検出した。重機による表土剥ぎ作業中に、現地形となる地山の傾斜が認められ、これより南東側に見られる漆黒色土中から、多量の石と古墳期の遺物が出土し、古墳周溝と把握された。伝承等不明の新規古墳で、畦地古墳群の末番となる７を新たに付し、畦地７号古墳とした。本古墳から、北西に60ｍ程の台地上には、銀製垂れ付き長鎖式耳飾り、馬具、玉類等を出土した畦地１号古墳が望まれる。南方の高岡１号古墳とは260ｍの距離をおくが、高岡古墳群、新井原古墳群が立地する緩傾斜地の北西端にあたる。

調査できたのは南東部１／７程の範囲である。確認した周溝内壁の肩部は、ほとんどの部分で攪乱を受けているが、周溝底部の状況から、円墳と考えられる。調査範囲が狭く正確な把握は困難であるが、墳丘基底部の直径は22ｍと推測される。周溝外側では38ｍが推測されるが、外壁は土坑12に切られ、溝とも重複している可能性がきわめて高く、構築当時の周溝外側までの規模は、やや小さくなる可能性もある。また、本古墳は斜面を利用して墳丘を盛り土しているため、墳丘基底部面でも、周溝の外側が検出された面より1.2ｍ程高い。このことで、墳丘を見上げる形となり、古墳がより大きく見える効果が得られたものと考えられる。

墳丘盛り土は、当初すべて削平されているものと考えられたが、北側の用地の土層観察によって、周溝の肩部分に残存していたことが把握された。確認できた層は大きく７層あり、残存高は旧地表面より40～50㎝を測る。これらの層は、粘質の黄色土がブロック状に混入した耐水性の高い土と、薄い層を何回も繰り返して一つの単位とした、浸透性が高いと思われる土とがほぼ交互に認められた。これは墳丘にしみ込んだ水が効率良く、しかも、一気に排出されないようにして、墳丘が崩れるのを防ぐ為に、行なわれた工夫と考えられる。

墳丘基底部の北側用地境には、見かけの長さ２ｍ、厚さ60㎝程の石があり、この部分に石室があったものと考えられる。この石の周囲を精査したが、石室底部に関する施設等の検出はできず、土層断面の観察によっても地山を掘り込んで、最下段に据えられた石であると言うほかは、奥壁なのか側石なのかの把握もできなかった。また、石の上部から西側の部分は大きく攪乱を受けている。元の地主の話によれば、この斜面は崩れた事があったとの事で、この時墳丘盛り土と共に石室も破壊されたことも考えられる。以上のように石室の詳細は一切不明であるが、地形等から考えて、石室ほぼ真南方向に開口した横穴式石室であったと判断される。

葺石は、調査できた周溝西端の肩の数個が現位置と認められるほかは、すべて周溝内に転落している。保存状態がきわめて悪いため、径５～30cm程を測る花崗岩の自然石が使われている事以外は何も把握できなかった。

確認した周溝のほぼ中央には、底部を南北に切るように段差が認められた。これより東側４～５ｍの間は壁も含め、土坑状の凹みが、不規則に多数切れ合ったようになっており、溝と重複して周溝との新旧関係は、土層観察部分が丁度土坑と切れ合っていた為、把握できなかったが、覆土は周溝と同じもので、時期差はほとんど無いものと考えられる。

正確な周溝の幅は不明であるが８ｍ程が想定できる。周溝底部は南端を除き溝に削られ、かつ斜面に検出されたため、溝の肩となる外壁より高くなる部分が多い。図中では標高453.00ｍからの数値を示したが、検出面からの深さが、かろうじて把握できた北側では21cmを測る。墳丘基底部からは121cm前後である。周溝内の覆土には漆黒色土と明褐色土の２層があり、下層の明褐色土層は古墳構築後あまり時間を置かないで、一気に埋まったものと考えられる。

ほとんどの遺物は上層の漆黒色土から出土している。特に確認した周溝の南西部には多く、ほぼ完形品となった壷は転落石の間や下に散らばっていた。土師器瑳は東部内壁中段の稜部に、つぶれて密着し出土した。また、提瓶は南東部の溝と切り合う部分で、周溝外壁が想定される部分から出土している。出土遺物には、土師器として壷、甕、碗、坏がある。

壷には瑳と坩がある。第１図１は須恵器大形瑳の模造品で⅔程残存している。頸部のほぼ中間に稜を持ち、口縁部は大きく外反している。胴部最大径のやや上に一孔があり、底部を平坦に仕上げている。内外面ともヘラミガキされるが、胎土がやや軟質のため器面は荒れている。小石粒、雲母を含む。焼成は普通で、うすい橙色である。

図化した甕４・５はどちらも内外面ともヘラミガキされた小形のものである。図化部の⅔程残存する前者は胎土中に雲母、小石粒を含み、ほぼ完全の後者には赤粒も見られる。どちらも焼成は良好、色調は茶色と明るい茶色を呈している。

椀としたものには頸部がくびれる６と、底部から口縁部まで垂直に立ち上がる７の二者がある。両者とも½残存し、内外面ともヘラミガキにより仕上げられ、内面黒色処理されている。色調は明るい茶色、胎土中には小石粒を含んでいる。焼成は頸部がくびれたものが良好、そうでないものが普通である。

坏には底部が丸い８・９・10と、平坦なものは未接合部も含め⅓～¼残存する。整形はすべてヘラミガキによるもので、１を除いて内面は黒色処理されている。焼成はすべて良好である。色調は１が赤味のある茶色、３と４が茶色を呈するほかは薄い茶色である。胎土中には小石粒を含み第１図10と第２図４にはやや大きな石粒も認められる。

須恵器には壷、提瓶、平瓶、甕、碗、蓋、坏、高坏がある。

壷の第２図５はほぼ完形品である。肩部に最大径があるもので、これより下部までくし状の工具によるけずりで整形されている。焼成は普通、うすい灰色を呈し、胎土中には小石粒と、石粒

を含んでいる。6はロクロによるくし状工具の整形がなされるもので、底部は板によるケズリの調整が見られる。小石粒を含む胎土で、明るい灰色を呈する。7は小形の壷で体部は残存する。胴部下半はヘラケズリにより整形されている。色調は灰色である。壷と判断できる破片には、叩き整形のものと、ロクロによるくし状工具の整形のものとがある。両者とも微小石粒を含む胎土で、灰色を呈している。壷の焼成はすべて良好なものである。

第2図8の提瓶はほぼ完存するもので、角状の把手を有する。ナデにより仕上げられ、背面にはロクロによるくし状工具の整形を残している。焼成は良好、灰色を呈し、胎土中には小石粒とやや大きめの石粒を含んでいる。

平瓶には二者あり、第3図は図化部残存、2は¼の破片でロクロナデとナデが認められる。前者は胎土中に微小石粒を含み、灰白色を呈する。後者は灰色を呈し。小石粒を含む。両者とも焼成は良好である。

甕として全体形の知れるものは無い。3の口縁部は¼残存している。波状紋を右回りに巡らすもので、数条の沈線が認められる。焼成は良好、胎土中には微小石粒を含む。色調はうすい灰色から灰黒色でむらがある。

碗とした4は⅓残存している。底部はヘラ調整され、最終的に体部同様ロクロのナデ整形される。焼成は良好、胎土中には小石粒を含み、紫がかった明るい灰色を呈している。

拓本で図示した5～8は壷、10～16は甕と判断した。外面にはカキメ及び平行叩き紋の整形が見られるが、内面はすり消されている。すべて胎土中には微小石粒が含まれ、焼成は良好である。色調はうす興灰色と明るい灰色のものとがある。

蓋には口縁端部内面にかえりを持つもの第4図1とかえりが無く、やや背の高い2がある。前者は完形、後者は½残存する。両者とも天井部までロクロナデで仕上げられ、焼成は良好、うすい灰色を呈し、胎土中には微小石粒を含んでいる。

坏には高台部を持つものと持たないものがあり、時期差が認められ、高台部の無いものにも二器種が存在する。3は蓋とも思われるもので½残存する。底部中央に薄い突起状部があり、ヘラ切り痕を残す。ロクロナデ整形で底部に窯印が認められる。4は5／1残存し、底部と体部が明瞭なものである。平坦な底部及び体部下半はヘラケズリにより整形されている。前者の胎土中には小石粒が含まれるが、後者は精良なものである両者ともうすい灰色を呈し、焼成は良好である。5は底部が欠落し高台部であるか不明であるが、6・7同様出土遺物のなかでは後出的なものと考えられる。底部が残存するものには切り離し後のヘラ調整が見られ、高台部から体部は最終的にロクロナデ整形されている。どれも胎土中に小石粒を含み、焼成は良好である。色調は½残存する6とほぼ完形の7が、うすい灰色、¼残存する5は灰色を呈している。

高坏にはほぼ完形の8と、坏部が欠損する9があり、両者とも器高の低いものである。前者は蓋付きと考えられ、脚部と坏部の付け根に四角い透かしを三カ所開けている。胎土中には小石粒を含み灰色を呈している。後者は焼きひづみの為か脚端部が外反しているが、前者との成形の違

いが見られる。色調は明るい灰色を呈し、胎土中には小石粒を含み、やや大きめの石粒も混入している。両者とも焼成は良好である。

玉類は、道路工事の期間等の関係で、現場での覆土水洗作業ができず、一部を持ち帰り水洗した。現場で出土したものも含め、切子玉、ガラス玉、臼玉を検出した。

切子玉は第5図1～9、第6図1～3の9個を検出した。すべて翡翠製で、全国的に見ても類例の少なく傑出したものである。上部から見た断面は四角いものであるが、八角形を意識してそれぞれの角を面取りしている。また、得られた石材に起因するものであろうが、丈の短いもの、有孔部面を斜めに仕上げているものがある。色調も緑を主体とするが、うすいもの、濃いもの、茶色味がかるもの、黒色のものなどがある。

ガラス玉は第3図4～12の9個が有る。一見して大小二種が存在するが、小さなものには、断面形が四角くなるものとそうでないものがある。色調は紺色のもの4～8と緑色の9～12があるが、それぞれに青味がかるもの緑味がかるものが有り、形態同様必ずしも二色に分けられない。

臼玉は13を1個検出した。滑石製で、暗い緑色をしている。

鉄製品には馬具、刀子、釘がある。

第7図1は中央部が曲がっているが轡の引手部分と考えられる。2は刀子の先端部である。3・4の角釘は周溝上部から出土しており、古墳に直接伴うかは不明である。

遺物は、6世紀前半から7世紀中頃までのものが混在し周溝内から出土した。7世紀に至る土器の出土については、南方200mにある高岡3号古墳の調査で、周溝内に8世紀にまで至ろうかという須恵器を出土した土坑2の例がある。この土坑の性格は断定できなかったが、高岡3号古墳となんらかの関係のあったものの行為と推測でき、本古墳に於いても1世紀を越えての祭祀的、追葬的行為が行なわれていた可能性がきわめて強い。本調査では遺構の確認はできなかったが、古墳が作られた事によって、後の時代にもなんらかの影響を与えていたものと考えられる。

本古墳の築造時期は、追葬時に掻き出され、周溝内に転落したと考えられる遺物から、6世紀代と考えられる。

図版番号	器形	法量（cm）				胎　土	焼成	色　調			備　考
		口径	胴径	底径	器高			外面	内面	断面	
1−1	瓿	18.8	17.9	6.7	23.8	小石粒、雲母含む	普通	うすい橙	うすい橙	うすい橙	⅔強残存
1−2	坩	9.1	(13.2)		−	小石粒含む	普通	うすい茶	橙	うすい茶	図化部残存
1−3	坩	−	12.3		−	小石粒含む	普通	うすい橙	明るい橙	うすい茶	図化部½残存
1−4	甕	−	(13.0)	5.0	−	小石粒、雲母含む	良好	茶	茶	茶	図化部⅔残存
1−5	甕(壷)	6.9	11.4	4.9	12.4	微小石粒、赤粒含む	良好	明るい茶	明るい茶	明るい茶	ほぼ完形
1−6	椀	16.0	15.4		11.6	小石粒含む	良好	黒色処理	明るい茶	うすい茶	½残存
1−7	椀	15.8	15.5		(11.4)	小石粒含む	普通	黒色処理	うすい茶	うすい茶	図化部½弱残存
1−8	坏	14.3	−		6.2	小石粒含む	良好	黒色処理	うすい茶	うすい茶	¼残存
1−9	坏	11.2	−		(5.6)	小石粒含む	良好	黒色処理	うすい茶	うすい茶	図化部¼残存
1-10	坏	14.9	−		(4.0)	石粒、小石粒含む	良好	黒色処理	うすい茶	うすい茶	図化部1/5残存
2−1	坏	15.2	−	8.3	(3.6)	小石粒含む	良好	茶	赤味茶	うすい茶	図化部⅓残存
2−2	坏	17.3	−	10.1	(4.0)	小石粒含む	良好	黒色処理	うすい茶	うすい茶	図化部1/8残存
2−3	坏	15.1	−	8.2	(4.1)	小石粒含む	良好	黒色処理	茶	うすい茶	図化部⅓残存
2−4	坏	−	−	10.0	−	石粒、小石粒含む	良好	黒色処理	茶	うすい茶	図化部ほぼ残存
2−5	壷	13.0	18.6		16.1	石粒、小石粒含む	普通	うすい灰	うすい灰	うすい灰	ほぼ完形
2−7	壷	−	12.9	6.6	−	小石粒含む	良好	灰	灰	灰	図化部ほぼ残存
2−8	提瓶	10.4	19.5		23.3	石粒、小石粒含む	良好	灰	灰	灰	ほぼ完形
		(胴厚12.5)									
3−1	平瓶	5.6	−	−	−	小石粒含む	良好	灰	灰	紫味茶	図化部¼残存
3−3	甕	24.9	−	−	−	微小石粒含む	良好	うすい灰	うすい灰	うすい灰	図化部¼残存
3−4	碗	8.3	7.9	5.6	3.7	小石粒含む	良好	明るい灰	明るい灰	明るい灰	⅓残存
4−1	蓋	9.7	−	−	2.7	微小石粒含む	良好	うすい灰	うすい灰	−	完形
4−2	蓋	9.8	−	−	3.7	小石粒含む	良好	うすい灰	うすい灰	うすい灰	½残存
4−3	坏	13.0	−	8.7	4.0	小石粒含む	普通	うすい灰	うすい灰	うすい灰	½残存
4−4	坏	14.5	−	11.5	5.1	微小石粒含む	良好	うすい灰	うすい灰	うすい灰	1/5残存
4−5	坏	11.2	−	−	−	小石粒含む	良好	灰	灰	灰	図化部¼残存
4−6	坏	14.7	−	9.8	4.3	小石粒含む	良好	うすい灰	うすい灰	うすい灰	½残存
4−7	坏	14.3	−	9.8	4.0	小石粒含む	良好	うすい灰	うすい灰	うすい灰	底部のみ½欠
4−8	高坏	12.5	−	10.0	6.8	小石粒含む	良好	灰	灰	灰	ほぼ完形
4−9	高坏	−	−	8.0	−	石粒混入、小石粒含む	良好	明るい灰	明るい灰	明るい灰	図化部ほぼ残存

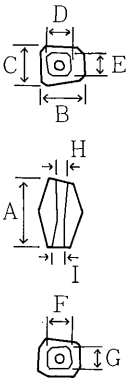
第１表　畦地７号古墳周溝出土土器計測表

（法量の底径欄空白は丸底）

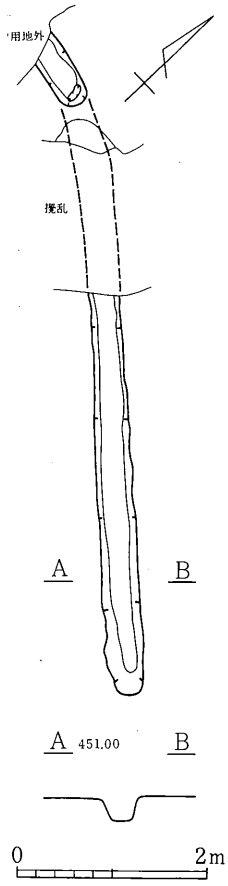
図版番号	器種	法量（mm）									法量	備考
		長さ	最大径		小口・径				孔・内径		重さ	
		A	B	C	D	E	F	G	H	I	(g)	
5－1	切子玉	14.4	11.3	10.9	7.3	6.7	7.6	6.7	3.2	2.3	2.4	黒色、一部黒茶色
5－2	切子玉	16.5	9.2	8.7	5.8	5.9	6.0	－	2.2	2.3	1.7	緑味白色
5－3	切子玉	14.4	10.2	－	5.7	5.7	5.9	－	2.4	2.4	1.9	緑味白色、一部にぶい緑色
5－4	切子玉	17.8	11.7	10.2	6.3	6.4	6.7	6.6	2.4	2.4	3.2	緑味白色、一部にぶい緑色
5－5	切子玉	15.1	9.5	9.7	6.1	5.5	5.7	6.1	2.3	2.1	2.1	青味緑～灰味黄緑色
5－6	切子玉	16.0	9.8	9.5	5.6	5.8	5.9	5.8	2.1	2.1	2.2	にぶい青緑色、一部うすい緑色
6－1	切子玉	12.7	9.8	8.9	6.3	6.5	6.5	6.0	2.1	2.1	1.5	灰味緑～うすい緑色
6－2	切子玉	16.9	11.3	11.5	6.3	6.1	6.3	6.2	2.6	2.6	3.2	にぶい青色～暗い緑色
6－3	切子玉	16.2	9.6	9.3	5.1	6.4	6.1	5.1	2.8	2.4	2.1	暗い黄茶～緑味白色
6－4	ガラス玉	6.2	9.5	－	6.5	－	6.7	－	1.4	－	0.6	紺青色
6－5	ガラス玉	2.5	4.9	－	－	－	－	－	1.2	－	－	紺青色
6－6	ガラス玉	2.7	3.9	－	－	－	－	－	1.0	－	－	紺青色
6－7	ガラス玉	2.1	3.5	－	－	－	－	－	1.1	－	－	暗い青色
6－8	ガラス玉	1.9	3.1	－	－	－	－	－	0.9	－	－	暗い青色
6－9	ガラス玉	2.7	4.3	－	－	－	－	－	1.5	－	－	暗い緑味青色
6－10	ガラス玉	2.7	3.3	－	－	－	－	－	1.4	－	－	にぶい青緑色
6－11	ガラス玉	2.6	3.3	－	－	－	－	－	1.4	－	－	にぶい青緑色
6－12	ガラス玉	2.1	3.5	－	－	－	－	－	1.0	－	－	青味緑色
6－13	臼玉	4.1	5.3	－	－	－	－	－	1.3	－	0.2	暗い緑色、滑石製

第２表　畦地７号古墳周溝出土玉類計測表

第６図５～12のガラス玉の重さは0.1g以下
切子玉、計測値はA～Iそれぞれの量大値



挿図５　切子玉計測方法



挿図6　溝状址1

2）溝状址1

①　溝状址1（挿図5）

道路を挾んで東側の調査区の中央、南側用地境に確認した。西側には撹乱に切られる部分があり、その先は用地外に延びている。確認できた長さは7m程で、幅は30〜40cmを測る。検出面からの深さはどの部分も15cm前後であるが、底部の比高差で見ると南東側が17cm低い。この南東端は浅い穴と切り合って止まっているが、北東側はいったん途切れるものの、軸方向を変えて延びている。途切れた部分の東側の軸方向はN52°W、西側はN80°Wを示す。壁面は比較的緩く立ち上がるが、地山が礫土層となる部分に近い所で検出されたため、拳大の石が混入しており、壁面、底部とも凹凸が激しい。覆土は黒色土の一層である。西から東へ傾斜しているものの途切れており、自然の流路とは考えにくく、なんらかの区画を意図した溝の可能性がある。しかし、これを裏付ける検証はできなかった。

遺物は出土せず、時期も不明である。

3）土　坑

本調査の土坑の記述については、今まで行なわれてきた規模を中心とする概念のほかに、覆土が、暗褐色土で、底部と壁画の境目が不明瞭なものも含めたため、直径数十センチの穴状のものも土坑として扱った。

①　土坑1（挿図6　第4図）

畦地7号古墳の周溝肩部検出中に、石の集中する部分が確認された。当初、葺石の一部と考え精査したところ二つの土坑となり、北側のものを土坑1とした。平面形は不整形で南北に長い。規模は2×1.4mを測る。深さは検出面から24cmを測る。断面形は全体として船底状を呈するが、壁面、底部とも凹凸がある。覆土は黒色土の一層で、拳大から頭大の石が混入している。石と共に一気に埋まっているが、人為的に埋められたものかの判断はできなかった。

遺物には、図化できない土師器坏と、第4図10・11の須恵器甕がある。どちらも焼成は良好、灰黒色と、灰色を呈し、10の胎土中には微小石粒のほかに小石粒も認められる。どれも破片で、本土坑に直接伴うものであるかは不明である。

時期、性格は、判断材料に欠け不明である。

② 土坑2（挿図6　第4図）

土坑1のすぐ南に、同時に確認された土坑である。南東隅は畦地7号古墳周溝の攪乱部とわずかに接している。平面形は不正方形で、ほぼ南北に長い。規模は1.45×1.1mを測る。深さは22㎝を測る。底部は比較的平坦で、断面形は逆台形となる。覆土は土坑1と同様で、黒色土に、拳大から頭大の石が混入する一層である。一気に埋まっているが、焼成は良好、灰白色を呈している。

時期は、出土遺物が本土坑に伴うものか不明の為、判断できない。性格も不明である。

③ 土坑3（挿図6）

確認した畦地7号古墳周溝の南東1.7mに検出した。平面形はほぼ円形であるが、西側の一部分以外は攪乱を受けている。規模は直径70㎝を測る。深さは検出面から18㎝である。底部はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。しかし、ほとんどの部分が攪乱の穴と重複しているため、本来の壁面の状態ではないと考えられる。本土坑の覆土は黒色土であるが、ほとんどの部分は攪乱土の、炭混じり灰色砂土である。

遺物には、図化等できない破片ではあるが、弥生時代の甕がある。

時期は、出土した土器が、覆土中に立った状態で確認された事から、この土器の時期である弥生時代中期と把握した。

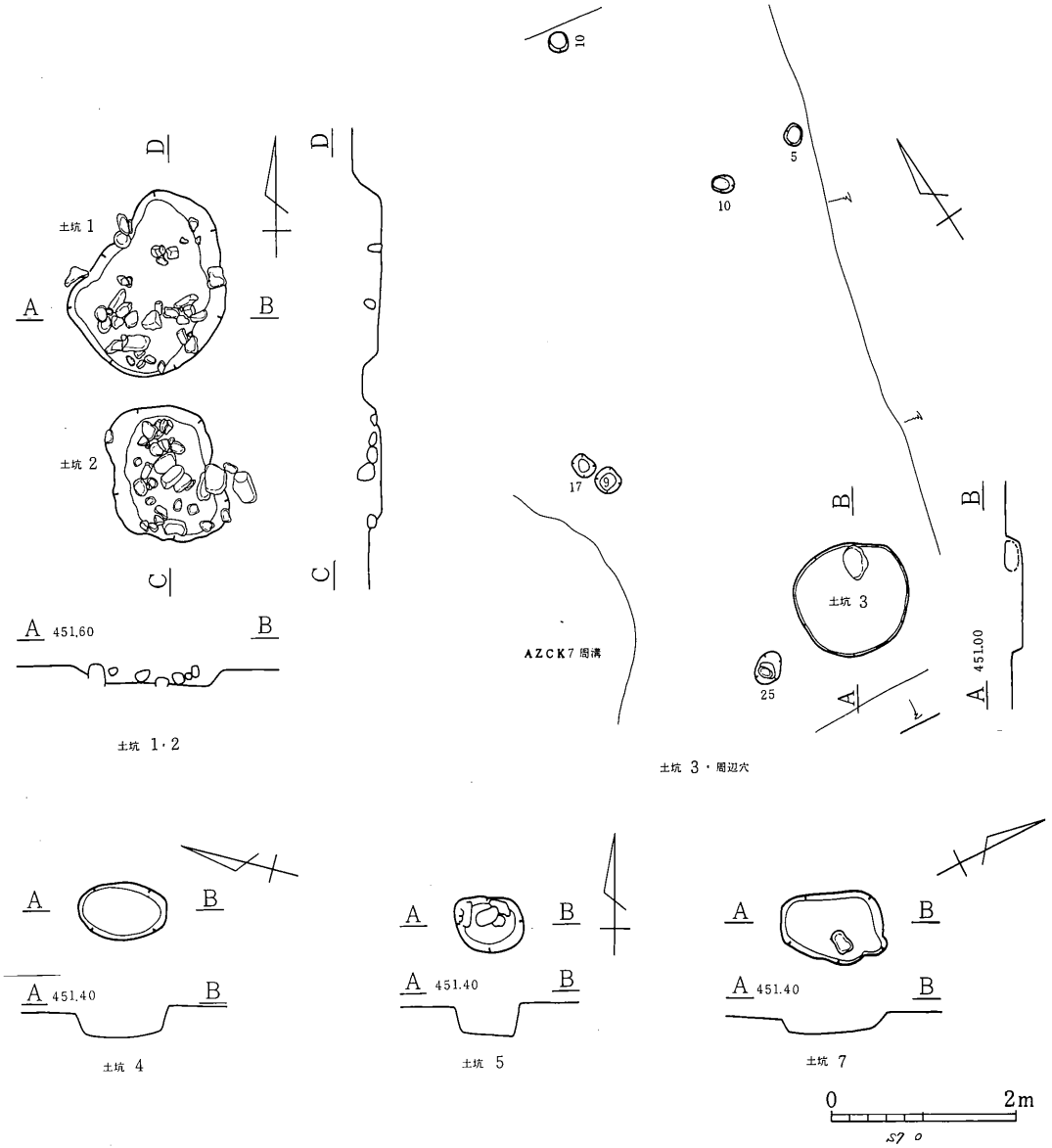
④ 土坑4（挿図6）

道路によって二つに切られた東側の調査対象地、北側部分に土坑7などと共に検出した。平面形は南北に長い楕円形で、規模は95×60㎝を測る。深さは35㎝である。底部は鍋底状で、壁面との境が明瞭でない。覆土は暗褐色土である。

出土遺物は無く、時期も不明である。

⑤ 土坑5（挿図6）

土坑4の南西1,4mに検出した。平面形は不正方形で、東西方向にやや長い。規模は70×60㎝である。深さは37㎝を測る。底部、壁面とも地山中の石が露出し、凹凸が激しい。覆土は暗褐色土で一気に埋まっている。



挿図７　土坑１•２•３（周辺穴）•４•５•７

遺物は、何も出土せず、時期は不明である。

⑥　土坑６（挿図７）

道路を挾んで東側の調査部分の、西側に確認した。穴と切り合うため、平面形は不整楕円となっている。規模は60×45cmで、深さは32cmを測る。壁面は比較的ゆるく立ち上がり、底部は鍋底状である。覆土は暗褐色土である。

遺物は出土せず、時期を判断できる材料はない。

⑦　土坑７（挿図６）

土坑４の南側１ｍ程の所に検出した。平面形は不正長方形を呈する。規模は1.1×0.7ｍを測り、北東南西方向に長い。深さは23cmである。底部はほぼ平坦で、壁面は角度をもって立ち上がっている。覆土は暗褐色土の一層で、一気に埋まっている。

遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

⑧　土坑８（挿図７）

土坑７のすぐ南に検出した。平面形は円形であるが、穴と切れ合うため、やや歪んでいる。規模は直径60cm程で、深さは20cmを測る。断面図は鍋底状で、壁の立ち上がりが明瞭でない。覆土は暗褐色土である。

出土遺物は無い。時期、性格は不明である。

⑨　土坑９（挿図７）

土坑７の南東2.7ｍに確認した。平面形は楕円形で、東西方向に長い。規模は50×40cmを測り、深さは34cmである。断面形は鍋底状となっている。覆土は褐色土の一層である。

遺物は何も出土せず、時期、性格は判断できない。

⑩　土坑10（挿図７　第４図）

穴と重複して確認された土坑で、西側1.6ｍに土坑７がある。平面形はほぼ円形で、直径30cmを測る。検出面からの深さは15cmと浅い。底部断面形は鍋底状となる。覆土は暗褐色土である。

出土遺物には、第４図13の土器の破片があるが、摩滅しており時期判断の材料にはならなかった。性格も不明である。

⑪　土坑11（挿図７）

道路を挟んで東側の調査範囲の、ほぼ中央ち確認した。平及形は楕円形を呈し北西南東方向に長い。規模は45×30cmを測り、深さは19cmである。壁面は角度をもって立ちあがるが、底部は鍋底状に中央部が凹んでいる。覆土は暗褐色土である。

遺物は、何も出土せず、時期、性格は不明である。

⑫　土坑12（挿図４）

畦地７号古墳周溝の東側を調査中に、北側の用地境にかかって、周溝が張り出す部分が認められ、のちの断面の精査により土坑と把握された遺構である。北東側が用地外となるため、正確な平面形は不明であるが、方形の掘り方と考えられる。土層により確認した東西方向の一辺の規模は1.6mを測る。南北方向はこれより長くなると思われる。深さは29cmである。底部は平坦で、壁面は比較的角度をもって立ち上がっており、断面形は、逆台形を呈している。覆土は周溝の最下層と同じ明褐色土に、わずかな黒色土が混入したもので、一気に埋まっており、基本的にはこれと同一層といえる。

遺物は、周溝の調査がほぼ終了する段階で本址が確認されたため、直接伴う遺物の把握ができなかった。

性格、詳細時期は不明であるが、土層の観察から本址は、先にもふれた古墳周溝の最下層を切って掘り凹められており、この層の上部に見られる漆黒色土に、本址覆土もおおわれている。この漆黒色土は古墳周溝のほとんどを埋めている層と同一のものであることから、古墳構築後あまり時期を置かない時期の遺構と考えられる。

４）その他の遺構

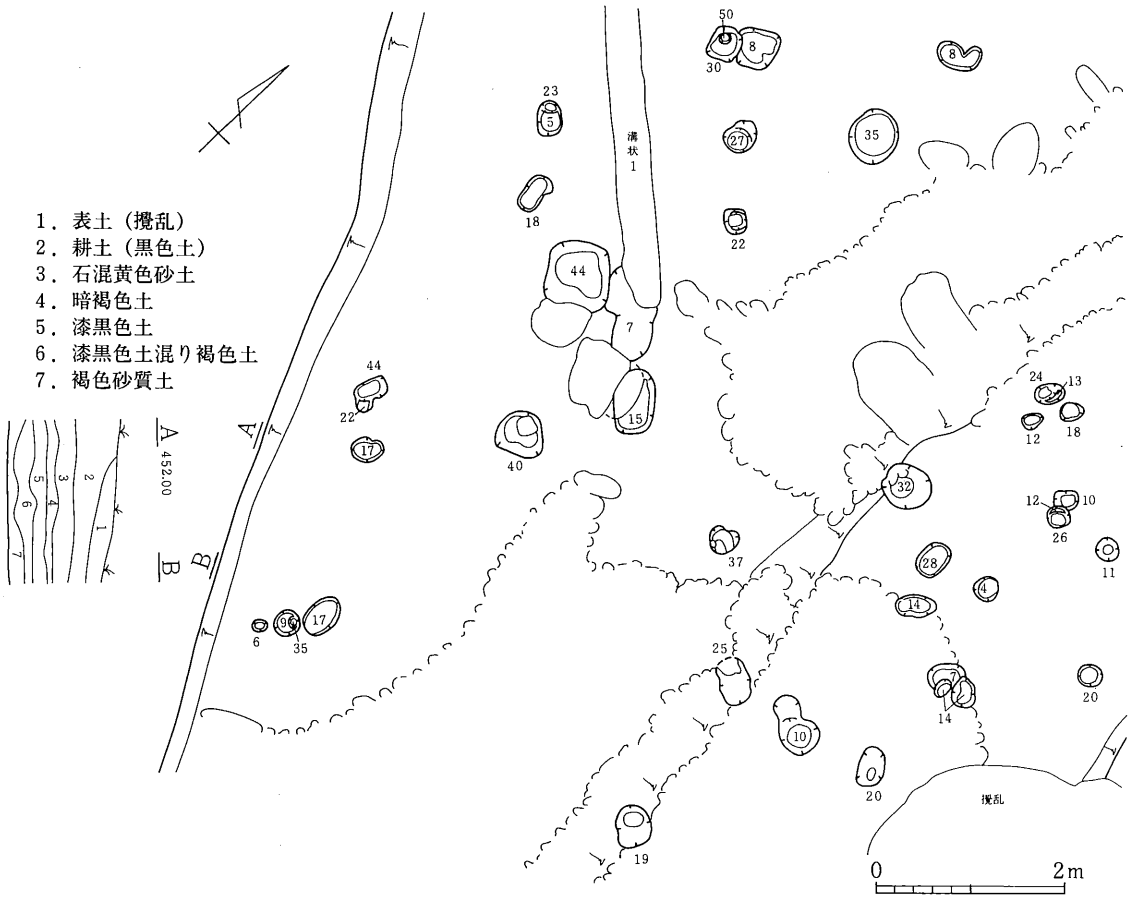
①　穴　址（挿図６・７・８　第４図）

本調査範囲に検出した穴は10余りを数え、直径20cm前後のもの、60cm前後のものとに大別できる。前者には平面形が方形となるものと、円形もしくは楕円形となるものが存在する。検出面からの深さは、５～57cmを測るものまであり、30cm程の深さまでのものが多い。また、方形を呈するものの方が、深くなる傾向がある。60cm前後の穴の数は少ないが、平面形には、円形、楕円形、方形を呈するものなどがある。深さ９～44cmとバラツキがある。覆土はどの穴も黒色土の一層を認めるだけであった。また、地山が礫土層となるため、壁面、底部ともこれに左右された掘り方となり、凹凸が激しいものがある。大小どちらの穴にも規則的な配列は認められず、特徴的な掘り方のものも無く、性格は不明である。

遺物を伴う穴は、ほとんど無いが、第４図14の灰釉陶器片や、図化できないが土師器片を出土するものがある。14は底部に籾殻痕が認められるもので、焼成は良好、白灰色を呈している。釉薬は薄い緑色で自然釉の可能性もある。

すべての穴の時期を確実に把握できる材料はないが、遺物を出土した穴と覆土がみな同じ事か

挿図８　土坑４～11及び周辺東部穴址、北側用地境部分土層図



挿図９　東端部穴址、南側用地境部分土層図

ら、どの穴も中世に位置付けられる可能性が高い。

5）遺構外遺物（第7・8・9図）

縄文時代

縄文時代の遺物としては、土器と石器があり、土器は第7図5の一点のみの出土で、鉢の底部片である。摩滅激しいが、沈線と縄文の施紋が見られ、中期中葉であろう。胎土中には小石粒、雲母が混入し、やや大きな石粒も見られる。焼成は普通、色調は茶色である。石器には打製石斧第8図1～8、第9図1～6の17点、横刃形石器第9図7の1点、用途不明石器として8の1点がある。打製石斧には、大、小、中の三種類のものが存在する。大形のものはいわゆる撥型で、厚みを持った石器である。中型のものには短冊型のもの、撥型のもの二者がある。さらに基部を丸くするものや、平らにするもの、側面が内側にカーブするものなどがあり、多様化している。小形のものの出土は少なく、一概に言えないが、短冊形を基本とし、基部をやや細く作り上げているものである。また、第9図6はサイドを一部研磨している。大きなものや小形の石器と比べ、中形の石器の形態が多様化しているのには、時期差というよりも、使用目的により柄への着装方法が異なったためにできた変化と考えられる。石材は第8図8、第9図2～6・8の7点が緑泥岩、それ以外のものは硬砂岩である。

弥生時代

本調査では遺構外の弥生時代の遺物は何も出土しなかった。しかし、縄文期とした石器の中で、小形のものには、本時期となるものが含まれている可能性がある。

古墳時代

本期の遺構外遺物は少ない。土師器として図化できるものはないが甕、坏がある。須恵器には第7図6・7・、壷8～11、甕12～15などがある。拓本等で示したもののうち、8の壷を除いてすべて畦地7号古墳周溝上部から出土しており、周溝内に転落していたものであろう。焼成はすべて良好、胎土中には微小石粒が見られる。色調は薄い灰色、灰色、暗い灰色などがあり、10・12・13には緑色の自然釉がかかる。

中世以降

検出した遺物は少なくみな破片である。壷、山茶碗、陶器、青磁、天目茶碗、紅皿、香炉などがあるが、本時期の遺構等の状況を把握できるものではない。図化した第7図16は山茶碗で、貼付け高台に籾殻痕が認められる。小石粒を含む胎土で、焼成はきわめて良好である。色調は灰白色を呈している。17は陶器で、高台端部を除いて青味がかった灰色の釉薬が施されている。胎土、焼成は良好なものである。ほかに、本時期に位置づくものとして、18の寛永通寶が一枚出土している。また、近世のものと思われるが、瓦質の土管も出土している。

Ⅳ　まとめ

今回の調査地点は、飯田工業高校建設に先立ち調査された、中世の墓坑や、縄文時代前期の遺物を出土した段丘崖下と連続する地で、同様の遺構、遺物の発見が予想され、かつ、現存、伝承合わせ50基をこえる古墳の存在が把握されている地区であることから、それらに関する遺構等の存在も考えられた。

実際の調査結果としては、縄文時代の遺構は検出できず、遺物も皆無に等しい。弥生時代については土坑一基が把握されただけである。続く、古墳時代については、新たな古墳一基を確認することとなった。中世の遺構については穴が確認されたのみである。

まず、弥生時代の土坑の存在について見ると、出土遺物も少なく、土坑それ自体から、新たな見解を得られるものではない。隣接する遺跡の調査によっても、本時期の遺構は稀薄となっている。しかし、南方の段丘上にある弥生時代の集落の勢力範囲が、なんらかの形で、段丘下まで及んでいたことが指摘できる。

古墳時代については、住居址などの遺構は確認できなかったが、古墳の存在が確かめられた。発見された古墳の墳丘部は削平されており、石室の最下段の石１つと周溝の一部を確認したのみであるが、伝承、過去の諸記録の無い新たな古墳である。実際に調査できたのは古墳全体から見れば１／７程で具体的な内容は不明である。

本古墳の構築時期を本文中では、出土遺物から６世紀後半としたが、周辺の古墳では５世紀から６世紀初頭には埴輪が存在するのに対し、本古墳には有しない事からも６世紀代に築造時期を与えるのが妥当といえる。

前述のとおり、本墳は限られた調査範囲であり、その内容は知る術もなく高岡１号墳を盟主とする古墳群中における位置づけも具体的には成し得ない。

しかし、翡翠製切り子玉の出土は、他に類例の無いものであり、その供給地を検討するとき、古墳時代後期に、この地に定住した集団そのものをも探る糸口を見い出すことができるともいえる。

また、本古墳も含め周辺の古墳についても、具体的な内容を把握できるものはごくわずかであり、それぞれの古墳の本質を明らかにするためには、個々の古墳について再度の検証を図るとともにこれら古墳群を墓域とし南方一帯に展開する恒川遺跡群の居住者の実態をも含めた精査検討が必要である。

中世の遺構について見ると、詳細不明の穴のみであるが、当調査地点の西側に接して、飯田工業高校建設に伴い調査された石行遺跡の遺構との関連から、なんらかの位置付けが見い出せるものと思われ、詳述はそちらに譲るが、当地区内において最近増加している発掘調査の結果に於い

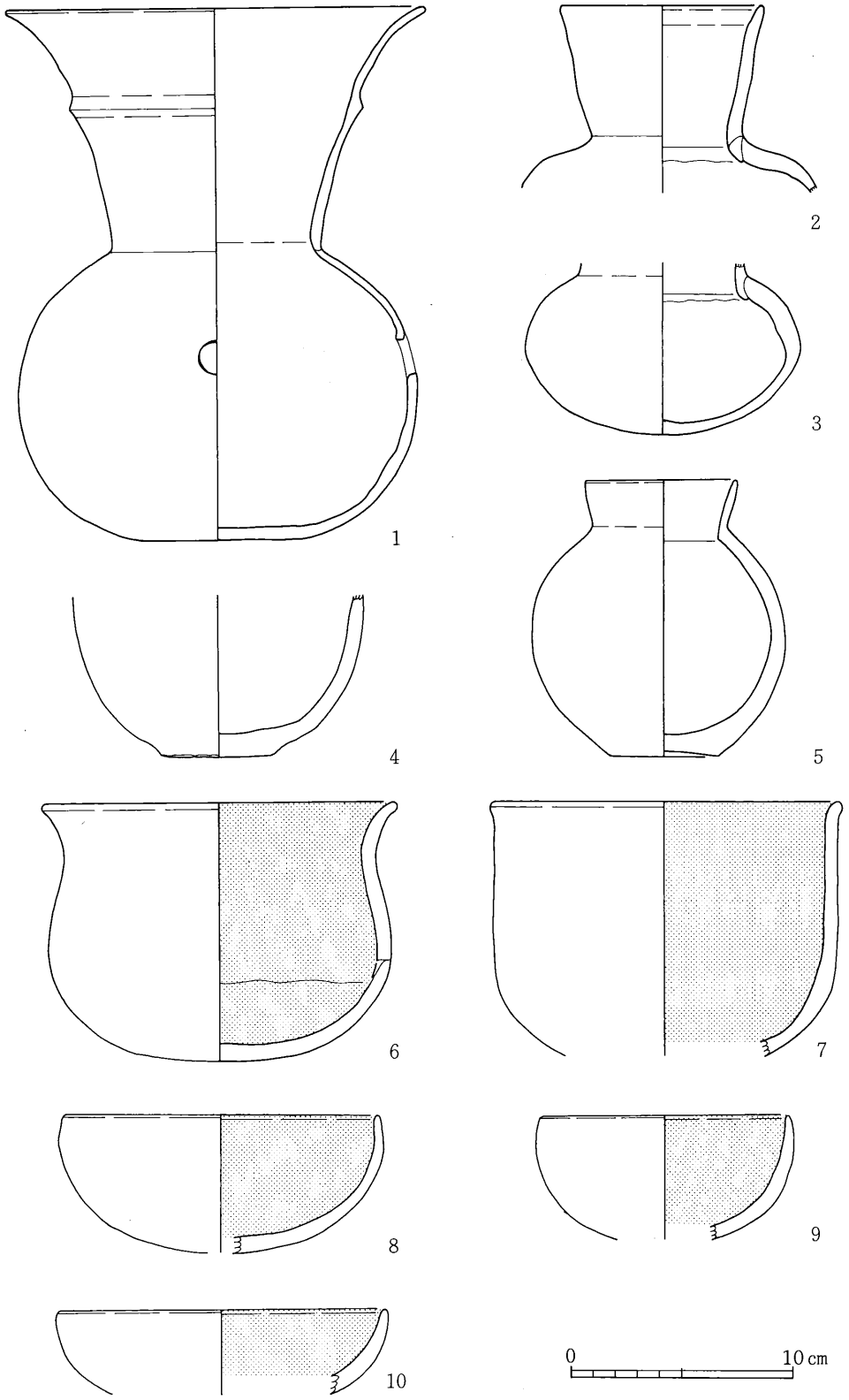
ても、中世以降は断片的な資料が検出されるのみで、この時期の、歴史事実の全体像は不明と言わざるをえない。

しかし、本調査地点の北西の台地上には、北本城、南本城の２城址を構築した人々の基盤が、この地区を含めた扇状地上に存在している事は間違いなく、古墳時代以降、もしくはこれ以前からの土地利用の姿を検討し、より明確にすることが、本地域内における中世以降の中心的地区の把握にもつながるものと考えられ、ひいては伊那谷全体から見た、本地域の役割をも明確にすることができるといえる。

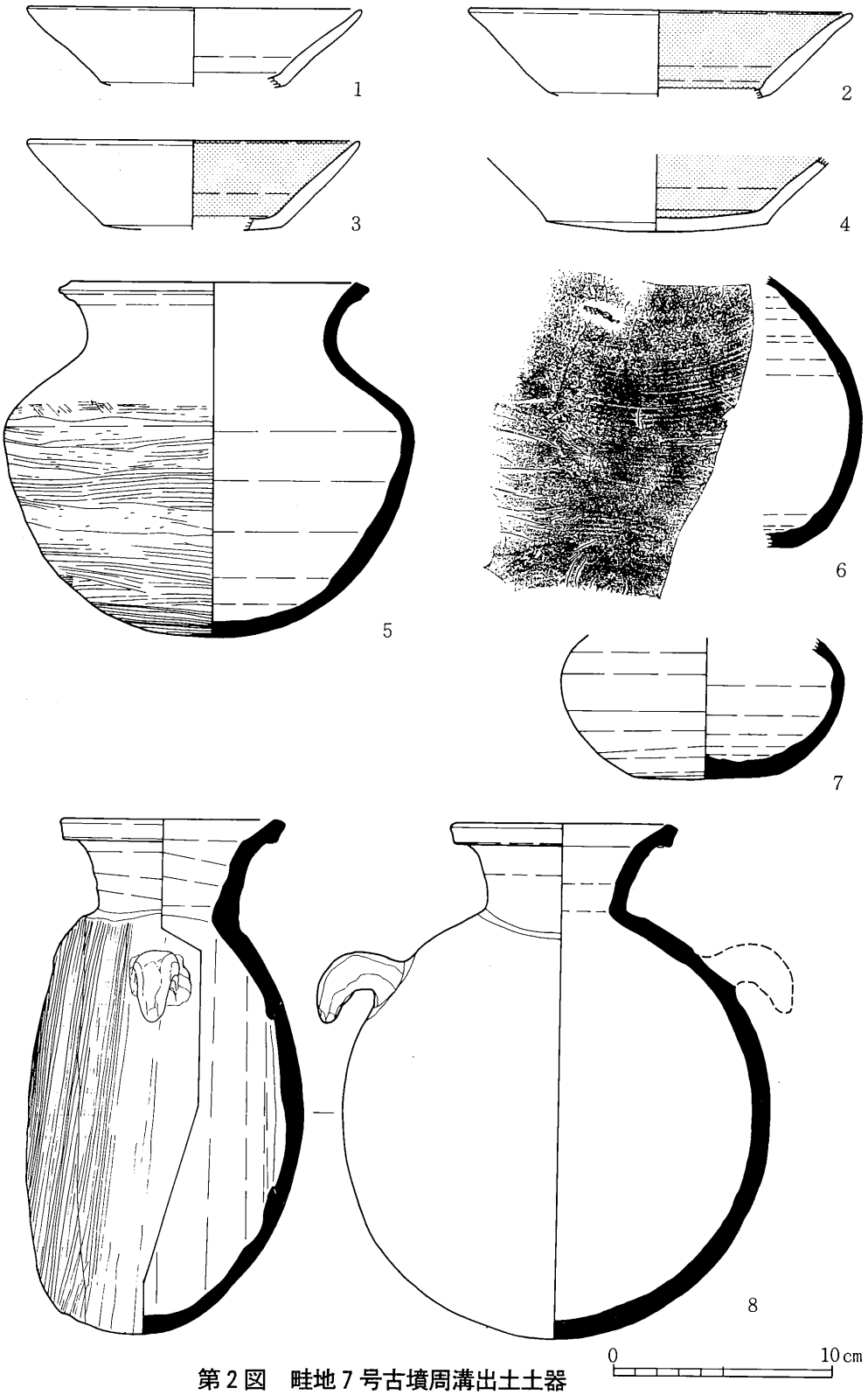
参考文献

	1991	「下伊那史」第１巻	下伊那史編纂会
市村　咸人	1955	「下伊那史」第２巻	下伊那史編纂会
市村　咸人	1955	「下伊那史」第３巻	下伊那史編纂会
松島　信幸	1966	「伊那谷の段丘」	下伊那地質誌調査資料No. 2
長野県史刊行会	1983	「長野県史」	考古資料編
飯田市教育委員会	1986	「恒川遺跡群」	
飯田市教育委員会	1988	「恒川遺跡」（田中・倉垣外地籍）	
飯田市教育委員会	1990	「高岡遺跡」―高岡３・４号古墳―	
飯田市教育委員会	1991	「高岡遺跡」―新井原18号古墳―	
飯田市教育委員会	1991	恒川遺跡群「新屋敷遺跡」	

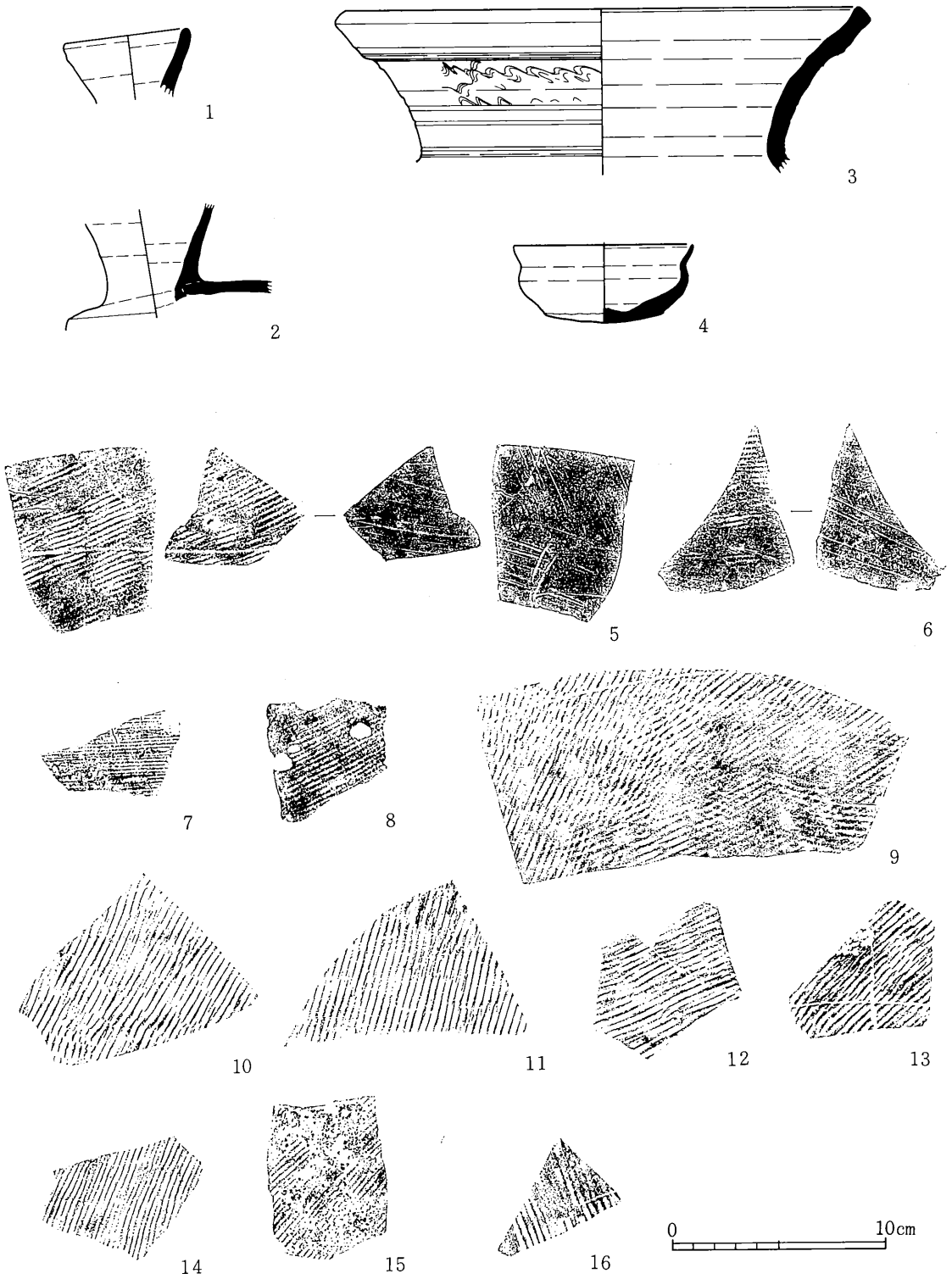
図　　版



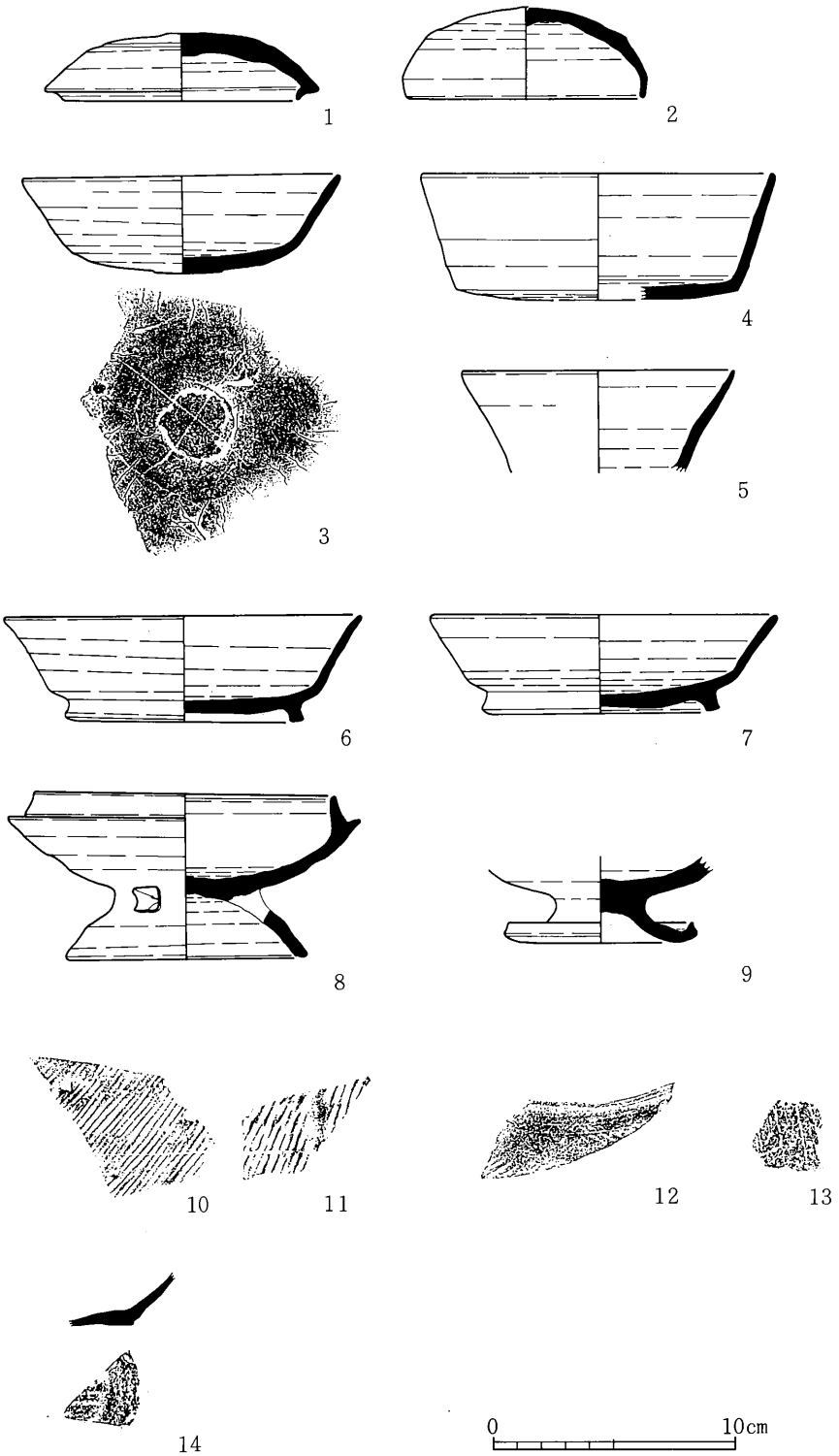
第１図　畦地７号古墳周溝土土器



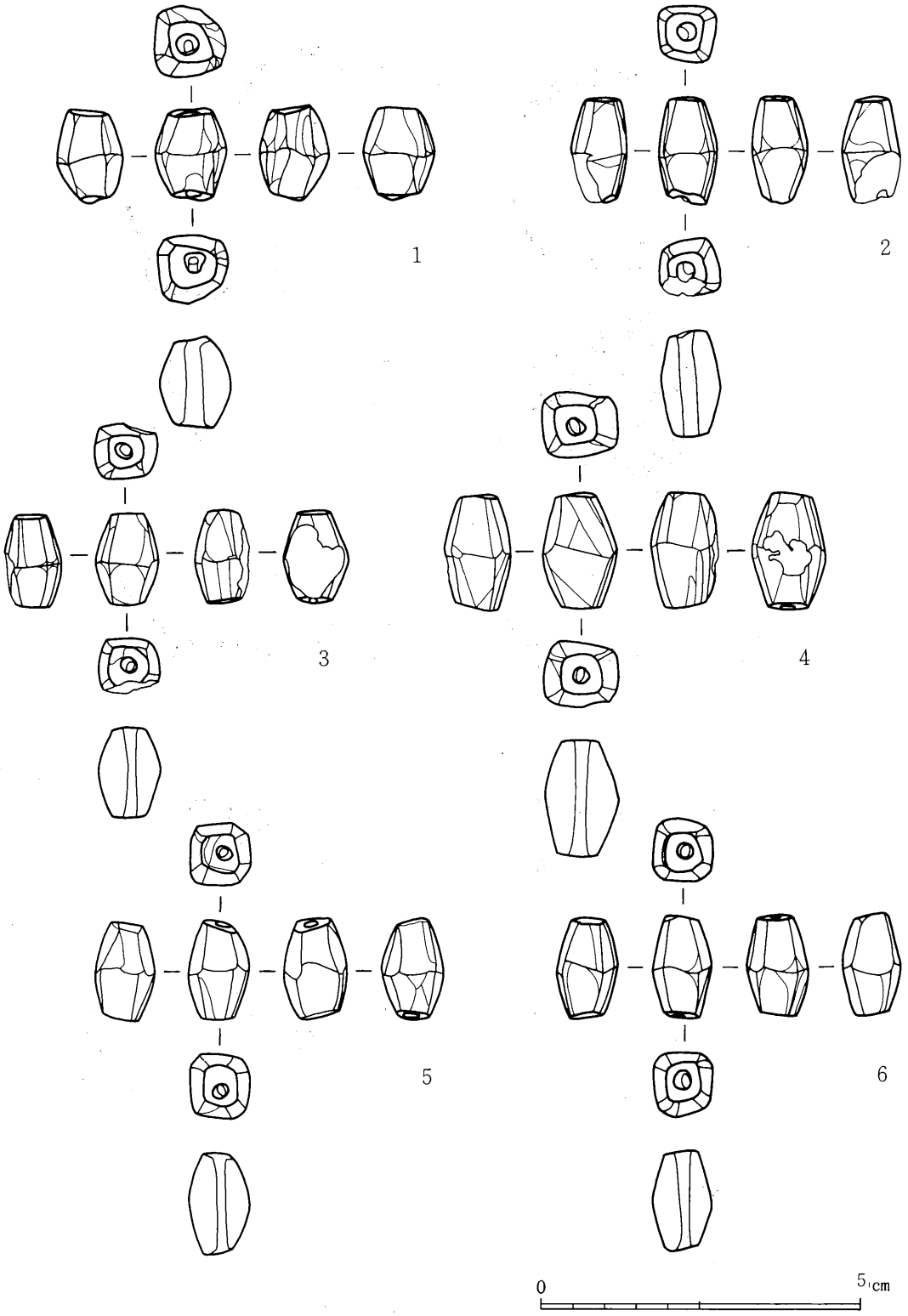
第２図　畦地７号古墳周溝出土土器



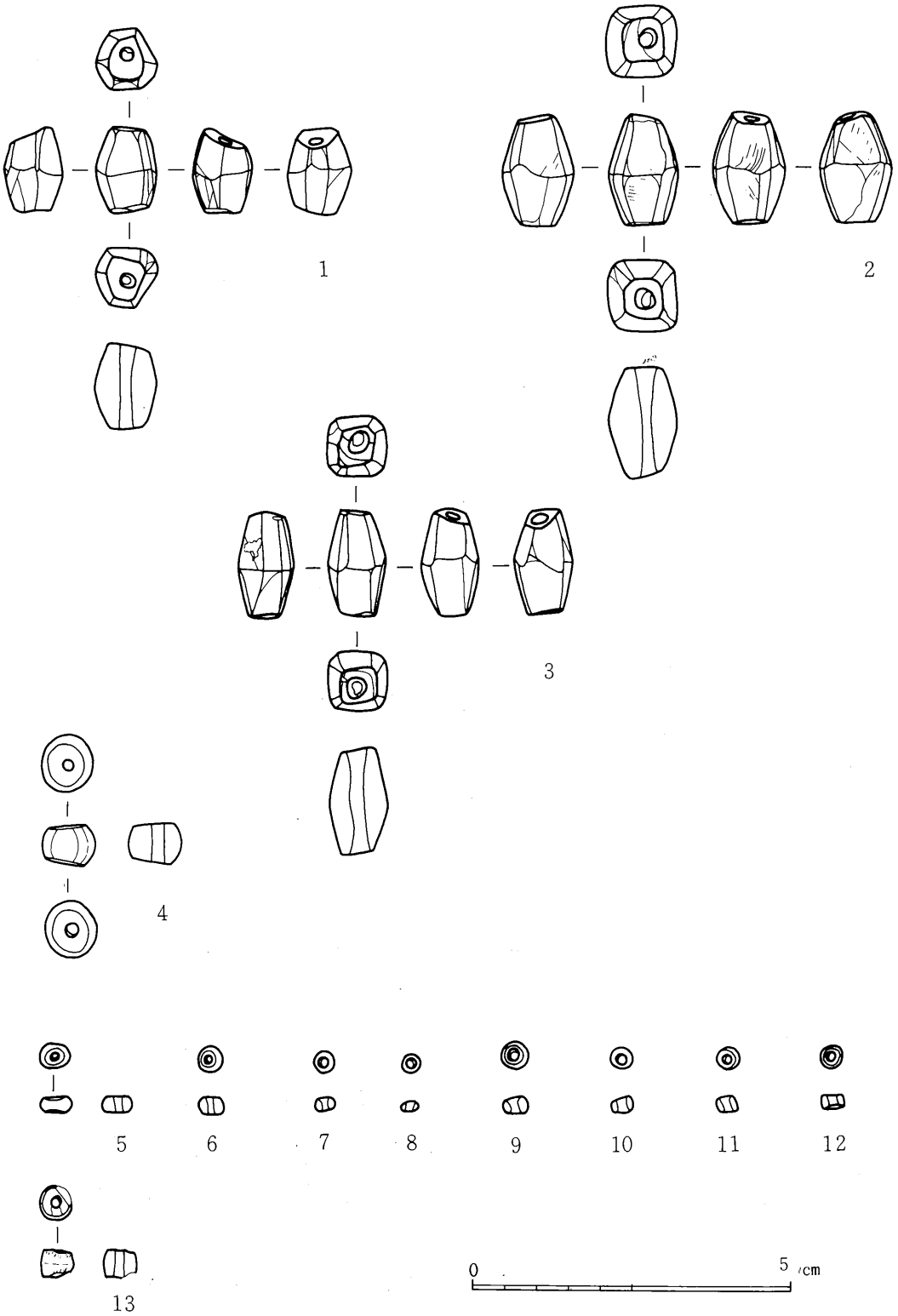
第3図　畦地7号古墳周溝出土土器



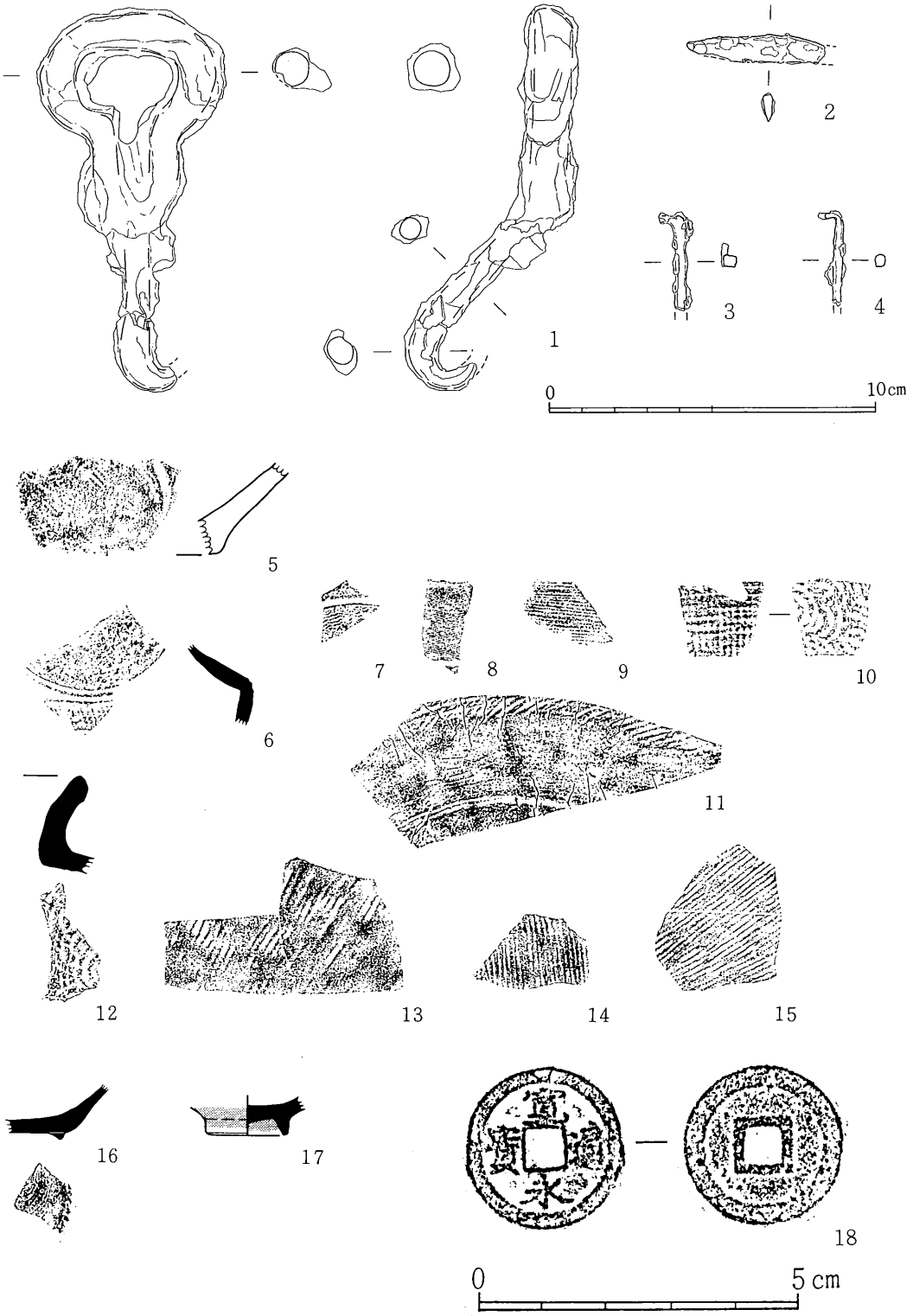
第４図　畦地７号古墳、土坑１•２•10、穴出土土器



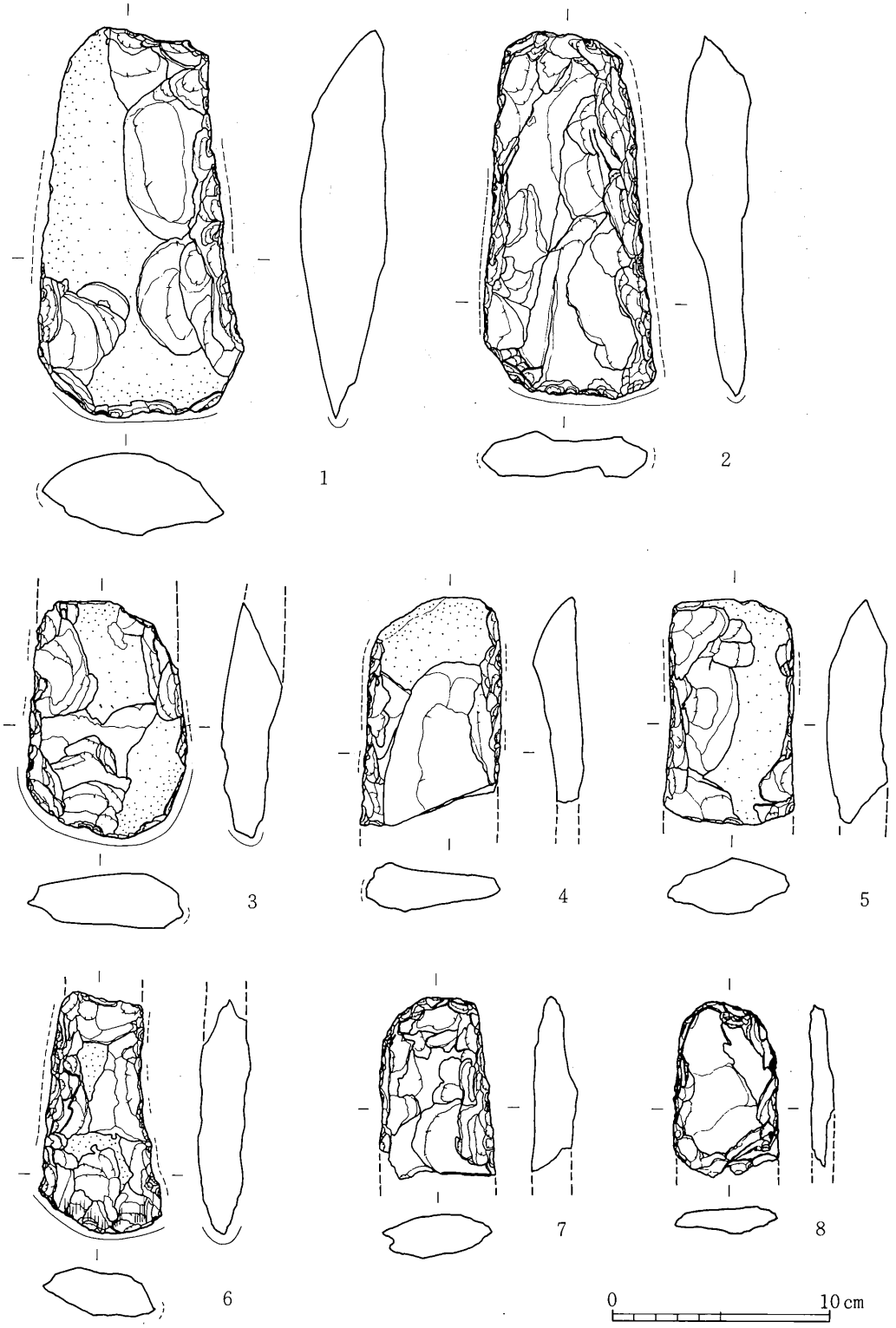
第５図　畦地７号古墳周溝出土切子玉



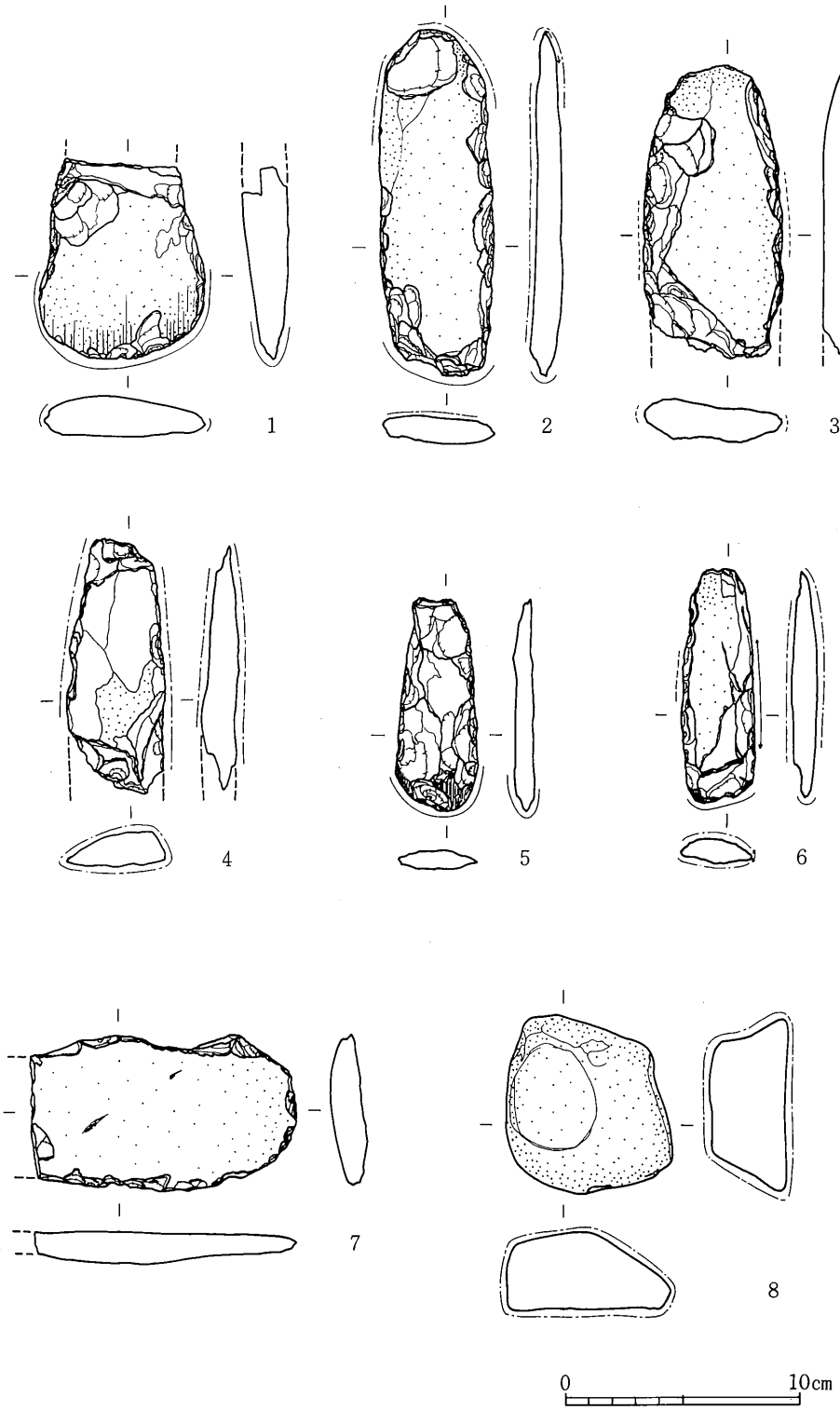
第６図　畦地７号古墳周溝出土切子玉、・ガラス玉、・白玉



第７図　畦地７号古墳周溝出土鉄製品、遺構外出土土器・銭



第8図　遺構外出土石器



第９図　遺構外出土石器

写 真 図 版

図版 1

調査地調査前（西から）

同上
西部（東から）

同
東部（西から）

図版 2

西部西側全景

東部全景（西から）

同上（東から）

図版 3

畦地 7 号古墳墳丘基底部及び周溝

同上

図版 4

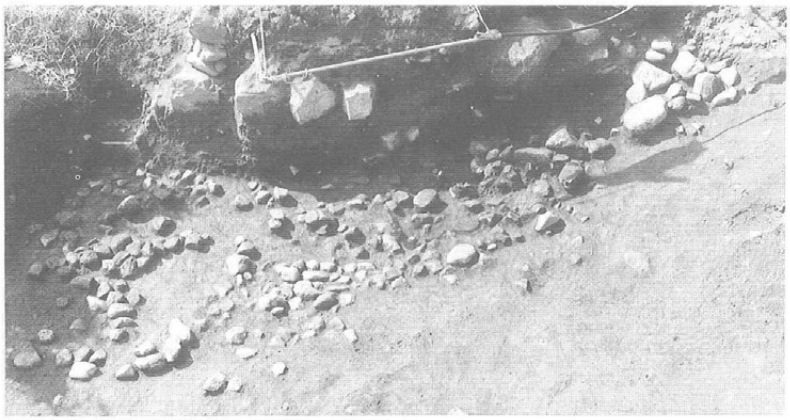
墳丘基底頂部
（土層断面）

同上　細部

周溝肩部
及び土層断面

図版 5

周溝肩部
細部土層断面



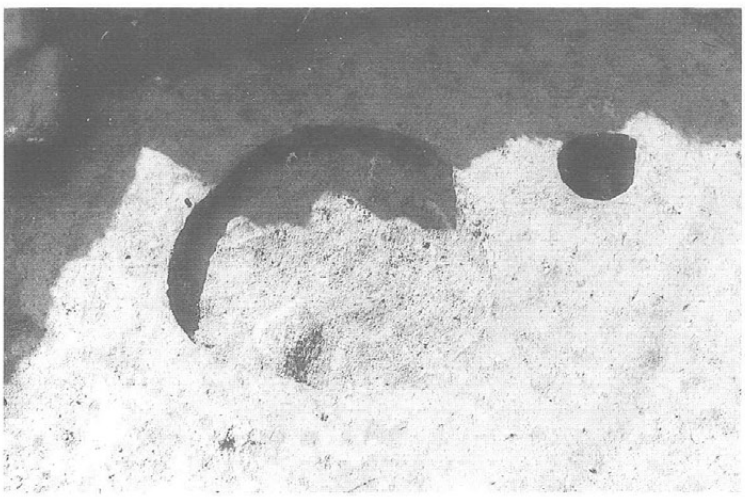
南西部葺石・転落石
検出状態

周溝東側溝址
切り合い状態

図版 6

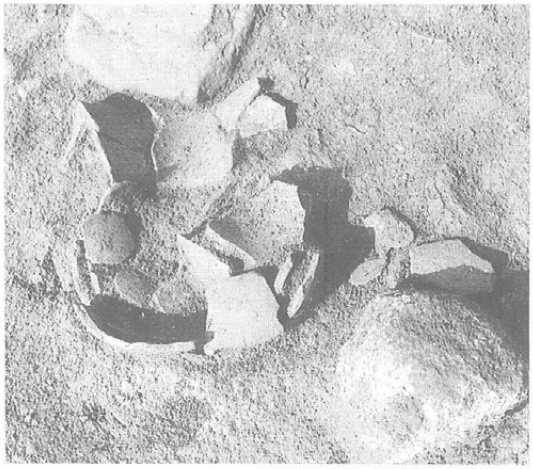
周溝及び溝
北側土層断面

土坑 1・2

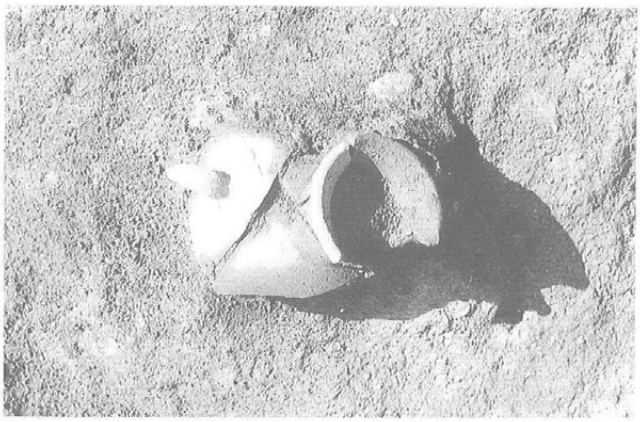


土坑 3

図版 7



土師器聰出土状態



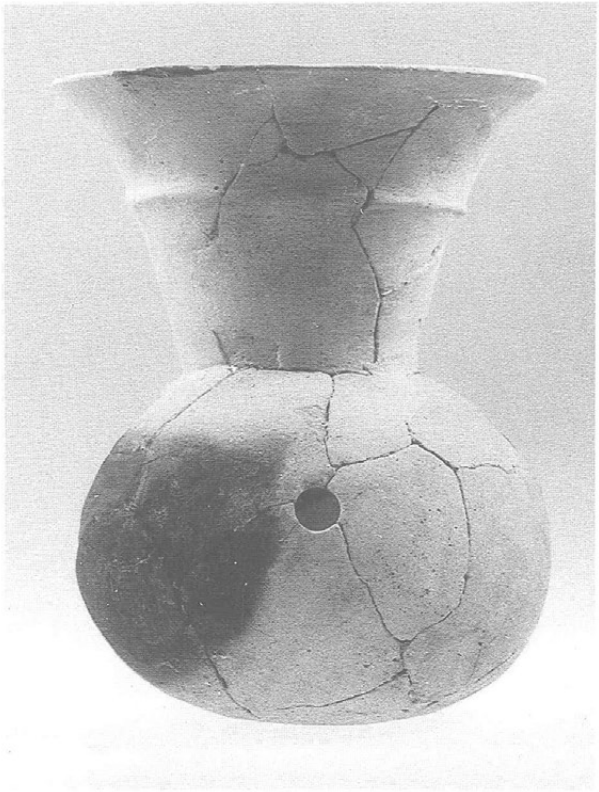
提瓶出土状態

須恵器壺・甕
出土状態

切子玉出土状態

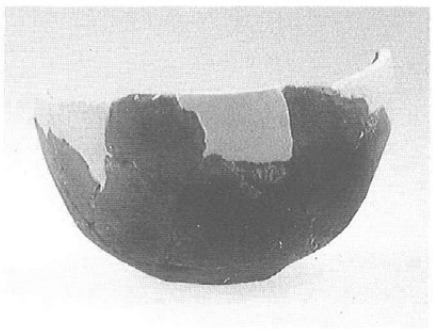
同上

図版 9

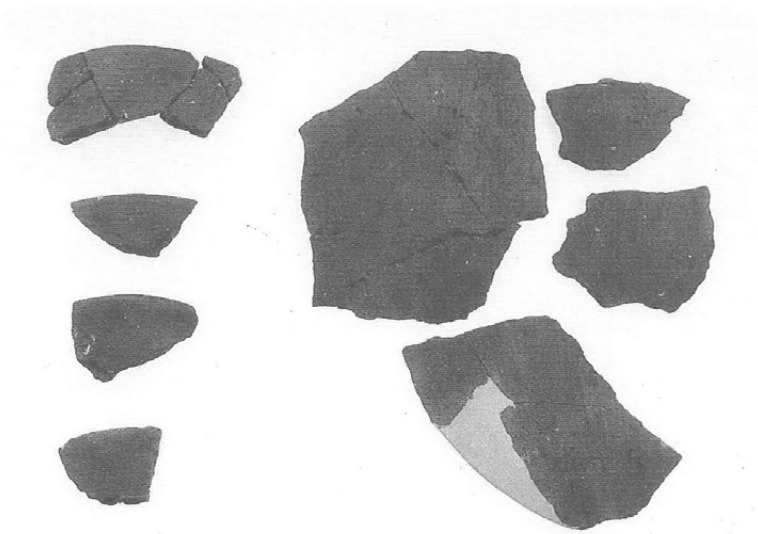


周溝出土土師器聰

周溝出土土師器小甕

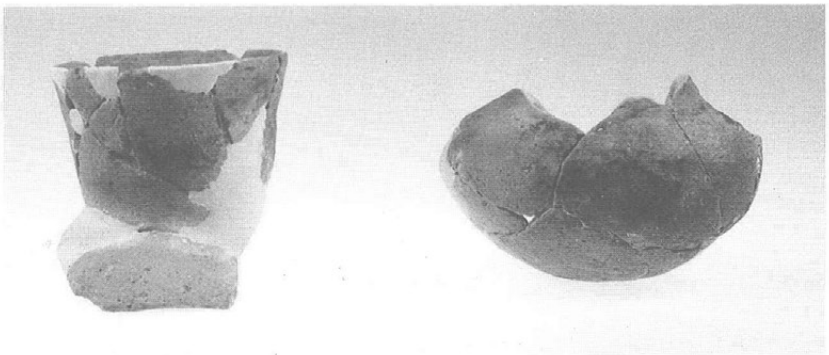


同　土師器甕

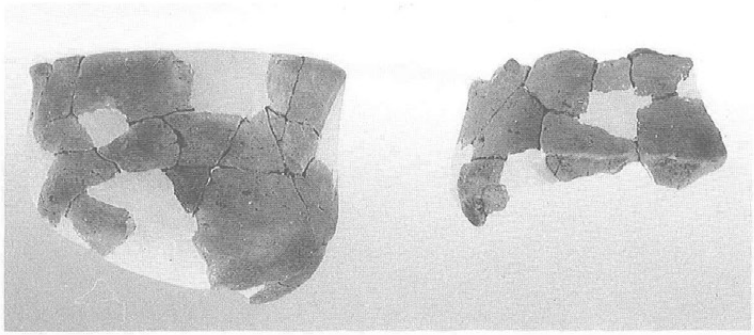


同　土師器甕

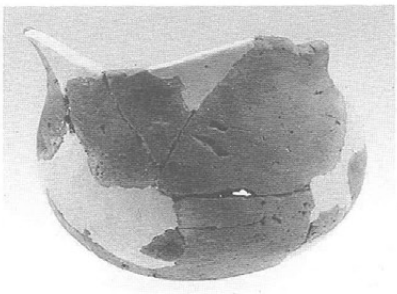
図版10



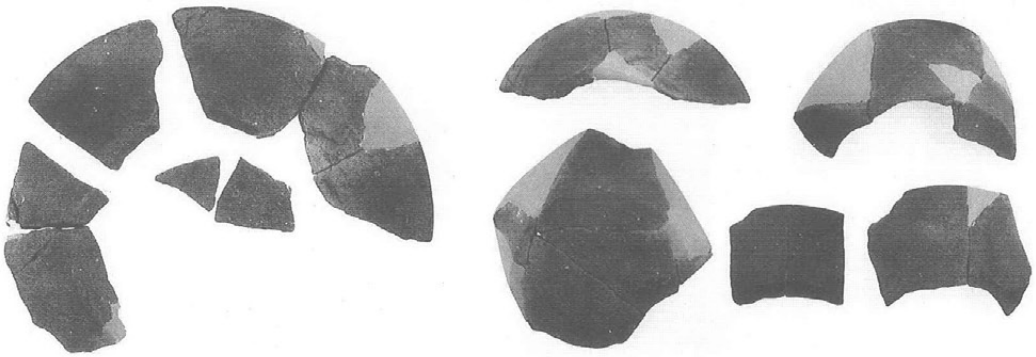
周溝出土土師器坩



同
土師器椀

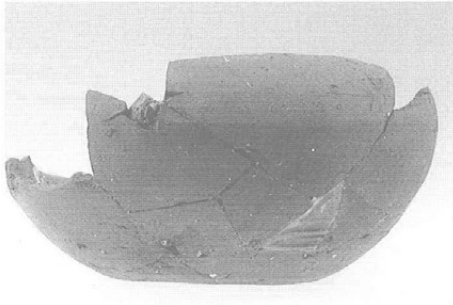


同
土師器椀



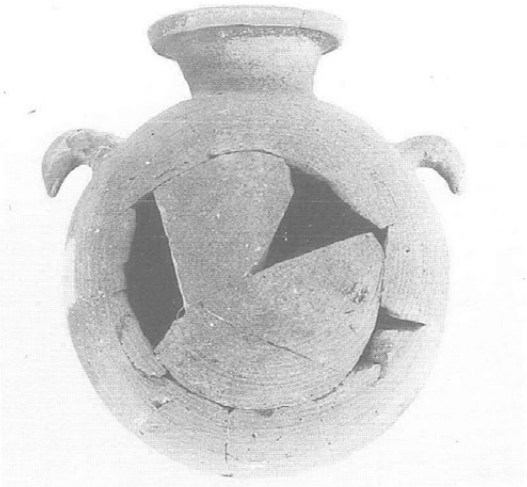
同　土師器坏

図版11

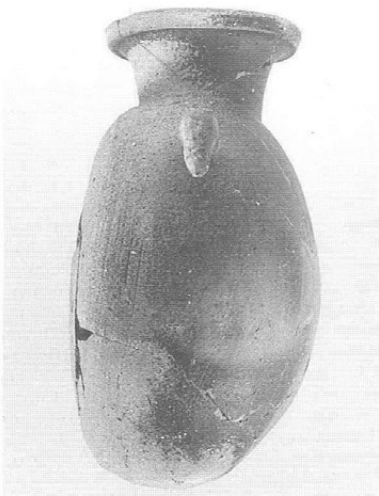


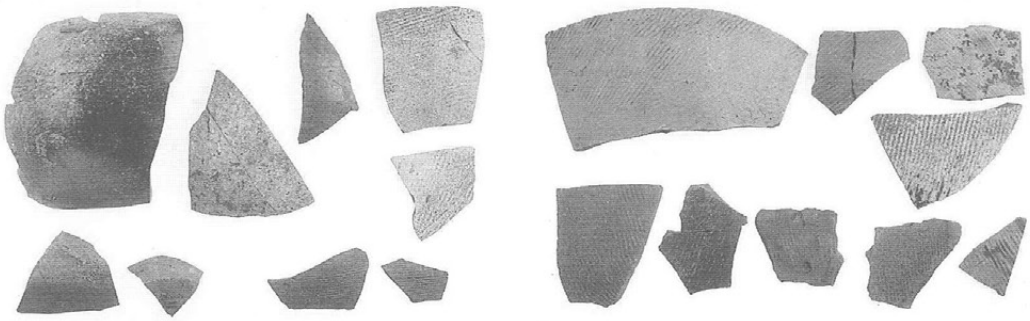
周溝出土須恵器壺

同　須恵器壺



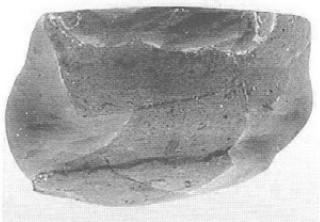
同　提瓶



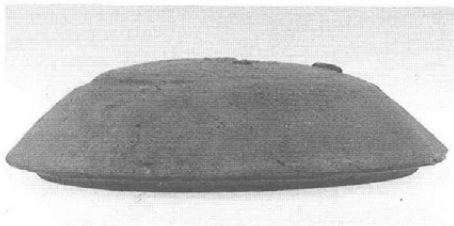


周溝出土須恵器 壺・甕

同　須恵器 甕



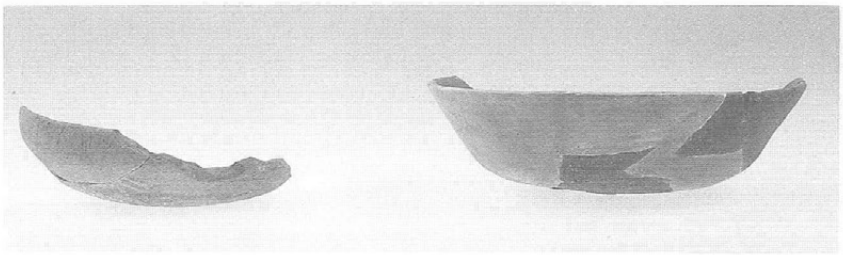
同　須恵器 碗

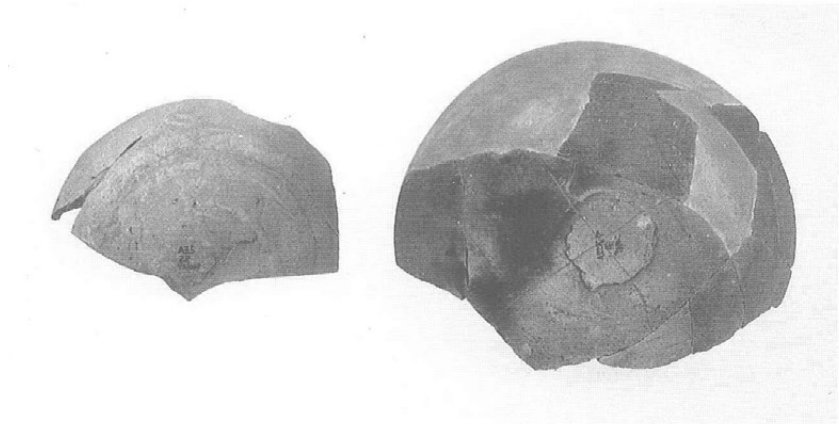


同　須恵器 高坏

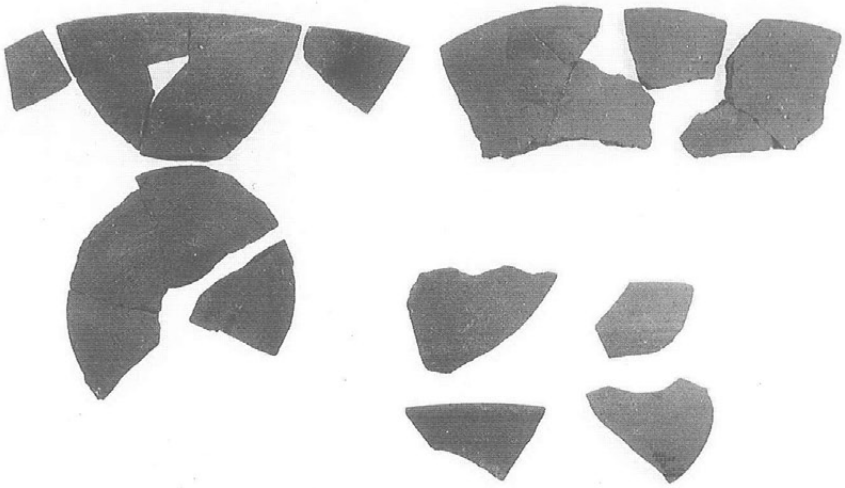
同　須恵器 蓋

図版13

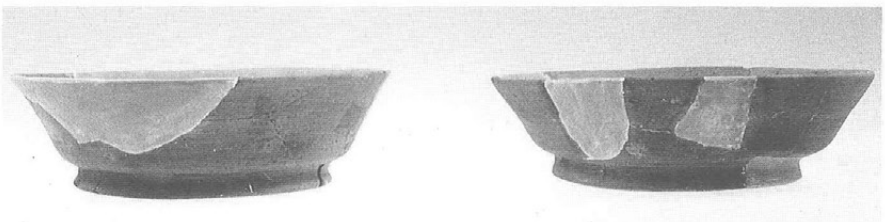




周溝出土須恵器
坏

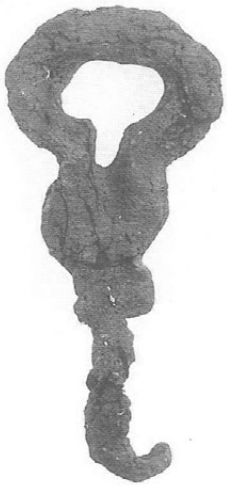


同
須恵器 坏

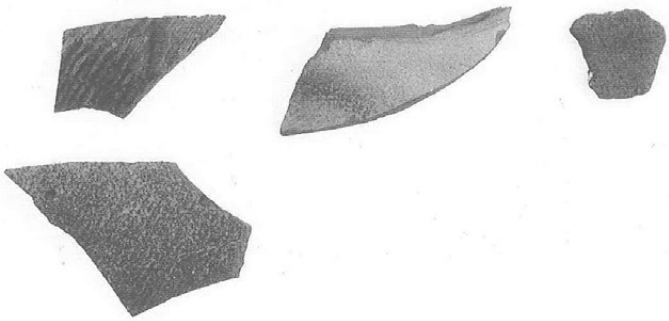


同
須恵器 坏

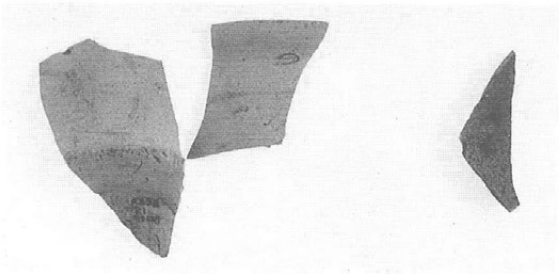
周溝出土切子玉・ガラス玉・臼玉



周溝出土鉄製品

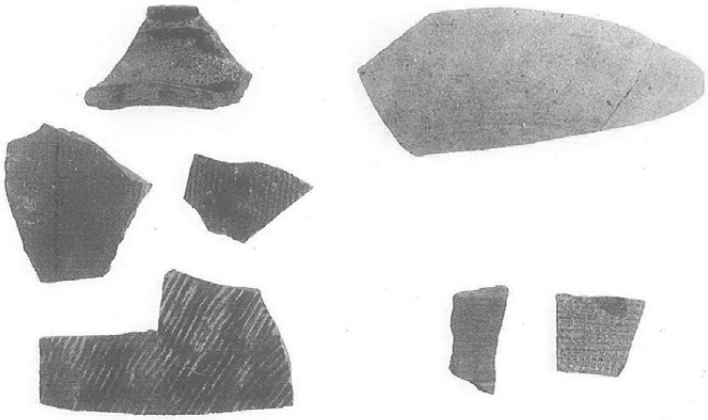


土坑出土 須恵器・土器（左から1・2・10）

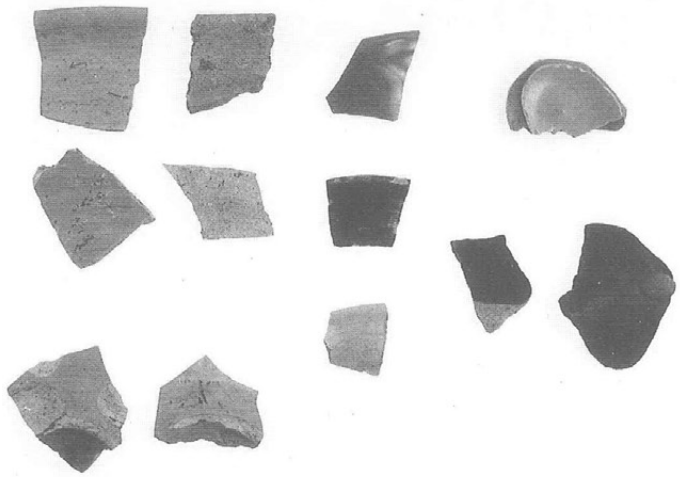


穴出土灰釉陶器
・須恵器

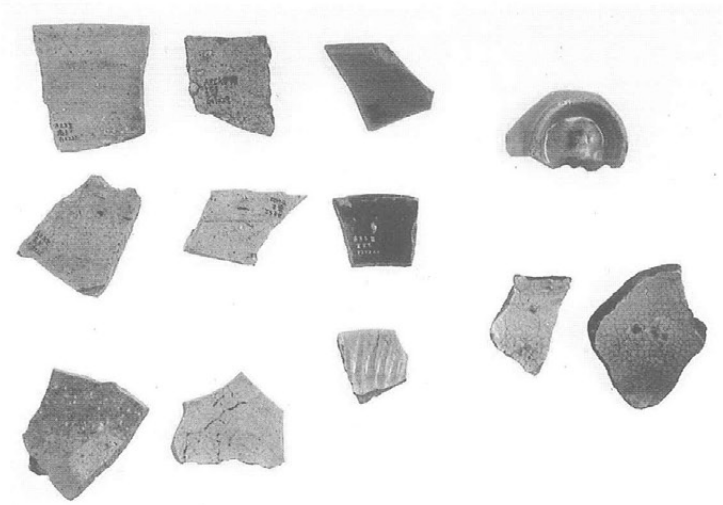
図版15



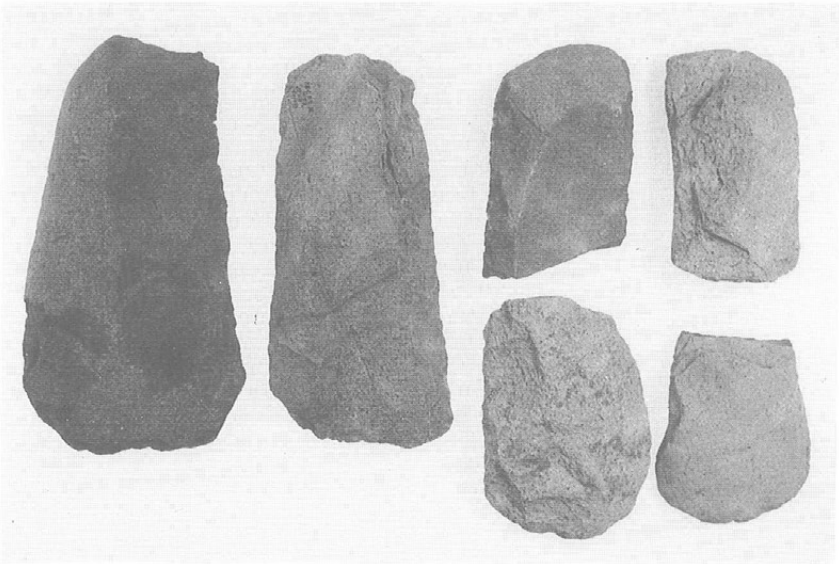
遺構外出土
須恵器 甕・壺



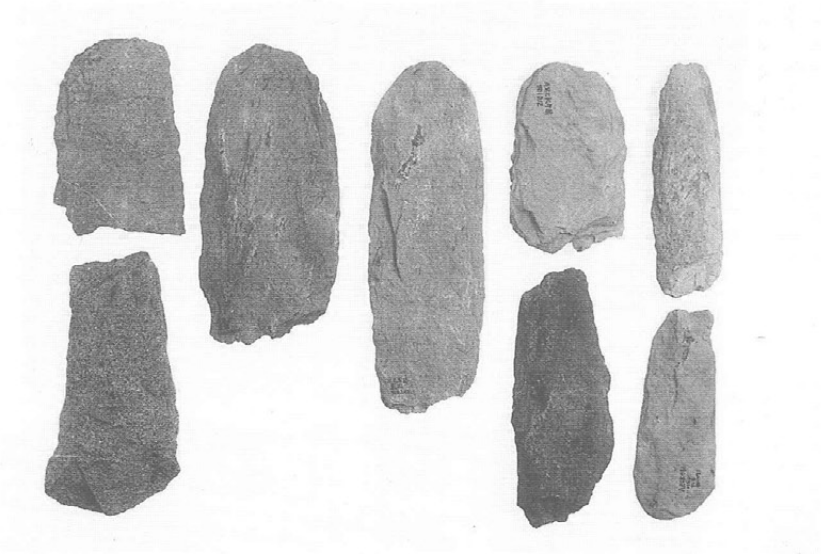
同
かわらけ・山茶碗・磁器
・天目茶碗・陶器



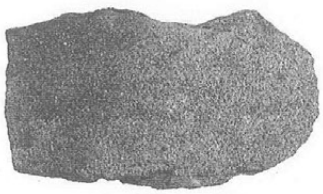
同上



遺構外出土石器



同上



遺構外出土石器

周溝上部出土鉄器、遺構外出土銭

図版17

重機による表土剥ぎ

同上

遺構検出作業

図版18

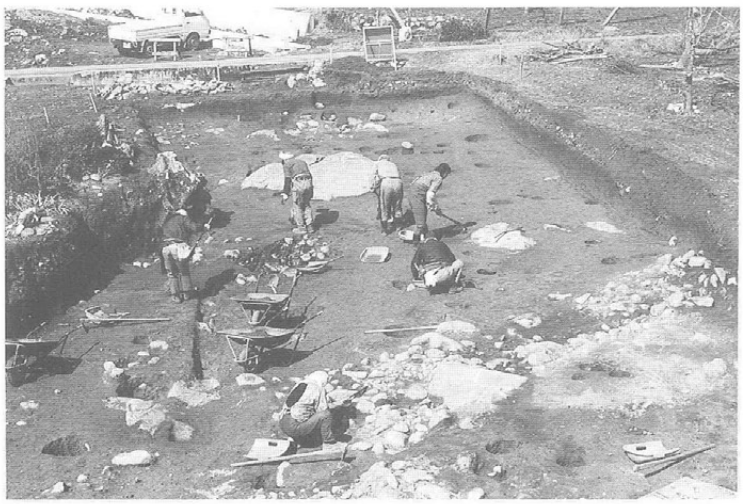
遺構検出作業

周溝掘下げ作業

周溝及び溝掘下げ作業

図版19

穴掘り下げ作業



清掃作業

測量作業

畦地下遺跡

— 畦地７号古墳 —

飯田市座光寺古市場地区市道改良に先立つ
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

平成４年３月31日発行

編集・発行　長野県飯田市大久保町2534番地
飯田市教育委員会

印　　刷　飯田共同印刷株式会社